

無愛想な君に恋をした

R R R R

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

昔の出来事により性格が変わってしまった主人公、土井悠哉。

悠哉はひよんなことから浦の星女学院に転入することになる。

悠哉はそこで桜内梨子と出会う。

二人はやがて親密な関係になっていく。

そこから二人はどうなるのだろうか…:

※この話はある地点で分岐点が発生し、梨子ちゃんの性格が全く違う物語となります。片方は純粋な梨子ちゃんですが片方はヤンデレ梨子ちゃんです。もしヤンデレが

嫌いな人がいたら、純粋な梨子ちゃんの話だけ読んでもらえるとありがたいです。

※更新頻度はとても遅いです。それでも読んでくれたらありがたいです。

※ものすごい駄作になります。それでも読んでいただけたら嬉しいですよ。

※ヤンデレはしばらく先です。

目次

プロローグ	1
初めまして	5
自己紹介	9
質問攻め	14
家話&不良	17
喧嘩	22
梨子の質問	28
質問攻め part 2	32
何故ここに	36
勧誘再び	39
入部	42

予備予選 or ピアノコンクール	45
TOKYO	50
梨子の決意	56
買い物デート?	61
梨子の告白	72
梨子が見たもの	75
verl 純粹梨子ストーリー	
真実	79
悠哉の過去 その1	83
悠哉の過去 その2	87
悠哉と健吾	94
高海千歌という女	99

愛の証明

103

Happy birthday 梨子

！俺はずっとお前のそばにいる

107

ver2 ヤンデレ梨子ストーリー

なんで

116

梨子の罭

120

監禁

125

逃亡

129

千歌と梨子

134

5年後の悠哉

140

プロローグ

人はとある出来事で性格が変わってしまふ場合がある。

それは良いことでもあり、悪いことでもある。

これはとある出来事で性格が大きく変わってしまった少年とその少年に恋をした少女の物語である。

~~~~~

朝6時半。俺、土井悠哉はまだベッドの中にいた。

「起つきろ〜！ もう朝だぞ〜！」

俺の腹に衝撃が走る。原因は姉の結菜であった。

「姉さん、いきなりベッドに飛び込んでくんのやめろ。」

「ええ〜、だつてこうしないと悠哉起きないじゃ〜ん。」

「そんなことない。いいから早くどけ。」

「ひどい！ お姉ちゃんにそんな口聞いちやダメなんだよ！」

「うるさい。 黙れ。 どけ。」

「口の悪い弟の言う事なんか聞きません！」

仕方ないから姉の言うことを素直に聞く。

「分かったよ。だから早くどいてください。」

「よろしい。朝ごはん出来てるから早めに済ませちゃって！」

「分かった。」

俺はそう言うのとベッドから出てリビングへ向かう。そして机に置いてあるご飯に手を付けた。

「悠哉、今日から新しい学校だけど大丈夫？」

「何が？」

「だって悠哉、女の子嫌いじゃん。」

「そうだけど何か？」

「いや、だから、悠哉の行く新しい学校って浦の星女学院じゃん。仲良くできるの？」

「安心しろ、仲良くする気は全くないから。」

「それはお姉ちゃんが大好きだからってことなのかな？」

「全然違う。」

「真向から否定された…。ほんと、無愛想になっちゃって。」

無愛想だろうがなんでも言え。このバカ姉。

「どうでもいいだろ。もう食い終わったから学校行ってくる。」

「は〜い。いつてらっしや〜い。 気を付けてね〜。」

~~~~~

俺がバスを待つっていると高海千歌と渡辺曜が来た。

「あ、悠君、おはよ〜!」

「おはようであります!」

2人があいさつしてきたので適当にあしらっておく。

「高海と渡辺か。なんか用か?」

「乗るバスがここから出るバスだから来たの。」

「そうか。」

「悠君、悠君って学校こっちだっけ?」

「ああ、今日からこっちだ。」

「じゃあ、これから一緒に学校に通えるんだね! やった〜!」

そんな話をしているうちにバスが来た。

バスに乗って一番後ろの席に座る。高海と渡辺も続いて座る。

「そういえば千歌ちゃん、スクールアイドル本当にやるの?」

「うん、もちろんだよ! こんなのも作ったんだ〜。」

「うわ、早! もう作ったの?」

「うん、こういうのは早い方がいいでしょ！　悠君はどう思う？」

「…」

「悠君！　話聞いているの!?!」

「うるさい。」

「ひどい！　曜ちゃん、悠君が冷たいよ〜。」

「え、私に言われてもどうしたらいいか分かんないけど…　確かに悠君、昔より無愛想になっただって感じだよ。なんかあつたの？」

あんまりそこには触れてほしくない。今でも思い出したくないのだ。

「うるさい。　その話はするな。」

そう言っているうちに学校に着いた。

ここから俺は波乱の日常を送ることになる。

初めまして

浦の星女学院に着いた俺はまず、理事長室へ向かった。

理事長室の扉にノックする。

「失礼します。」

中に入ると金髪の女性と黒髪の女性がいた。

「こんにちは！あなたが土井悠哉君？」

「はい、そうです。」

そう答えると金髪の人が自己紹介をする。

「そう、良かった！ あ、私、小原鞠莉。この学校の3年生。そしてこの学校の生徒兼理事長よ！ よろしくね！」

生徒兼理事長なんてできるものなのか？ 疑問に思いながらも一応返事は返しておく。

「よろしくお願いします。」

「うん、よろしくね！ ほら、ダイヤも自己紹介しないと！」

すると、今度はダイヤと呼ばれた黒髪の人が自己紹介をする。

「分かっていきますわ！ わたくしは鞠莉さんと同じく3年生で、生徒会長の黒澤ダイヤですわ！ 以後お見知りおきを。」

「こちらこそ、よろしくお願ひします。」

そんな先輩方の簡単な自己紹介が済む。そして、小原先輩が口を開く。

「じゃあ、悠哉君、職員室の前田先生の所へ行つてくれる？そこでクラスのこととか教えてもらえるから。」

「はい、分かりました。」

小原先輩にそう言われた俺はすぐに理事長室を出ようとした。

「悠哉君、一つ質問、いいかしら？」

ドアの取っ手を手に取った時に小原先輩に呼び止められた。

「何でしょうか？」

「あなたの前の学校の先生に聞いたんだけど、女の子が嫌いって本当？」
突然の質問に驚いたが普段通りに返す。

「ええ、大嫌いですよ。」

「そう、それは何で？」

「話したくないって言うのはダメですか？」

「まあ今はいいわ。じゃあ、職員室に行つていいわよ。」

「そうですか。では、失礼しました。」

俺はそう言うときさっさと理事長室から出て職員室に向かった。

「あの子、大変そうね。そう思わない？　ダイヤ。」

「そうですわね。この学校は女子高ですし。きつとつらいのかもしれませんが。」

「そうね。楽しく過ごせたら何よりだけど難しそうね。」

~~~~~

理事長室から出た俺は足早に職員室に向かい、今は担任となる前田先生の所にいた。

「こんにちは。今日からあなたのクラスの担任になった前田よ。よろしくね。」

「よろしく願います。前田先生。」

「よろしくね。土井君。あ、そうだ、こっちの子も紹介しておかなくちゃね。」

「こっちの子?」

俺が顔を上げるとそこにはもう一人、同じ年くらいの赤紫色の髪の女の子がいた。

「こちらはあなたと同じで今日転入してきた桜内梨子さんよ。桜内さん、自己紹介してあげて。」

「あ、は、はい。初めまして。さ、桜内梨子です。音ノ木坂学院から来ました。よ、よろしく願います。」

「名山学院から来た土井悠哉だ。よろしく。」  
この時、俺と梨子は出会った。

## 自己紹介

俺と桜内の自己紹介が終わると前田先生は教室に案内してくれた。

「じゃあ、君たちのの事をクラスの皆に話してくるから、呼んだら来てね。」

『はい』

俺と桜内は先生に言われ、教室の外で待っていた。すると、桜内が話しかけてくる。

「土井君、自己紹介ってどんな事言ったら良いと思う？」

何故俺に聞いてくるのか。でも聞かれたからには返すのが礼儀だと思う。

「前の学校とあとよろしくって言うっておけば良いと思う。」

「そ、そっか。」

簡単に適当に返す。それに対し、桜内はなんだか曖昧な反応だ。

「土井君は好きな物とかってあるの？」

何でそんなことを聞いてくるのだろうか。正直面倒くさい。

「それ言わないとダメか？」

「あ、別に言いたくなくてもいいんだよ。ちょっと気になっただけ……」

変な奴。俺の好きな物聞いたってなんの役にも立たないだろ。

「俺の好きな物聞いてなんか意味あるか？」

「そ、そうだね…」

「桜内さん、土井君、入ってきて！」

「はい。じゃあ先に行つて。」

「あ、うん。分かった。」

そして教室に入つていった。

~~~~~

梨子Side

土井君は前田先生が言つていた通りの人物だった。とても無愛想で人を寄せ付けない雰囲気。先生は同じ転入生だから仲良くしてつて言つてたけどとても仲良くする雰囲気はあちら側にはない。とりあえず、色々と質問してみる。

「土井君、自己紹介つてどんな事言つたら良いと思う？」

すると、土井君はとても冷たい口調で、

「前の学校とあとよろしくつて言つておけばいいと思う。」

と返してきた。なので私は

「そ、そっか。」

と返した。とても適当だったから嫌な気分になんかさせてないかな。一応好きな物とかも

聞いてみる。

「土井君って好きな物とかあるの?」

すると土井君は

「それ、言わないとダメか?」

と返してきた。やはり仲良くする気など毛頭ないのだろう。

「あ、別に言いたくなければいいんだよ。ちよつと気になっただけ…」

少し小さな声で返事をする。

「俺の好きな物聞いてなんか意味あるか?」

土井君は少し怖い口調で返す。

「そ、そうだね…」

そんな会話をしていると、前田先生に呼ばれた。

「桜内さん、土井君、入ってきて!」

「はい。じゃあ、先に行つて。」

「あ、うん。分かつた。」

私の中で彼は少し怖い存在になっていた。

梨子 Side End

~~~~~

先生に呼ばれて教室に入る。教室の中は見事に女子しかいなかった。苦痛でしかない。

「今日からこのクラスに転入生の二人です。仲良くしてあげてね。じゃあ、桜内さんからお願い！」

「あ、はい。東京の音ノ木坂学院から来ました。桜内梨子です。よろしくお願ひします。」

「奇跡だよ！」

は？と思つて顔を上げると高海が立っていた。

「高海さん、静かにしなさい。まだ土井君の自己紹介が終わっていないんだから。」

「は〜い、つてあれ？悠君何でここにいるの!？」

「高海さん！静かにしなさい！」

「は〜い。」

何やつてんだあいつは。相変わらず後先考えずに行動するんだな。

「ごめんね。じゃあ次、土井君、自己紹介しちやつて！」

「はい、分かりました。えっと、共学化のテスト生で名山学院からこの学校に来ました。土井です。よろしく。」

簡単に挨拶を済ませると前田先生が最後に

「土井君は男の子だけど仲間外れにしたり、いじめたりしないように。じゃあ、二人は、窓側のあの空いてる席に座ってくれる？」

と言う。

『わかりました。』

と言うと俺と桜内は窓側の席に座った。

「それでは、ホームルームを始めます。」

とりあえず、しっかり授業を受けよう。

## 質問攻め

「スクールアイドル、やりませんか!？」

俺と桜内は高海にスクールアイドルの勧誘をされていた。桜内はともかく、何故俺まで… スクールアイドルというのは基本女子高生がやるものだ。俺がやるなんてありえない。

「やらない。」

「ごめんなさい!！」

俺がきつぱりと断った直後に、桜内は高海に謝った。

「ええ、やろうよ。こんなにキラキラしてるんだよ!！」

「それは女子高生がやるもんだろ。俺は男だ。だからできない。」

「マネージャーっていう仕事が入ってるよ! ね、昔からの仲でしょ!！」

昔からの仲だからと言って手助けをするという決まりはない。それに昔からの仲だったら知ってるだろ。俺が女子嫌いなこと。

「桜内さんもやろ! 桜内さんがやったら、すっごいキラキラするよ!！」

「え、遠慮しておきます…。」

「遠慮なんてしなくていいんだよ！さあ！ほら！一緒にスクールアイドルやろうよ！」  
相変わらず強引だ。そう思いながらその場から脱出を試みる。

「あく、悠君逃げようとしてる！なんで逃げるの！」

チツ、ばれたか。面倒くさい。

「お前が何と言おうが俺はスクールアイドルのマネージャーなんかやらない。やりたくもない。マネージャーだったら他を当たれ。」

「ぶく、悠君のケチ！やってくれてもいいじゃん！」

「何とでも言え。」

そう言い、俺は教室へ戻っていった。

「はあく、本当、悠君冷たくい。桜内さんもそう思わない？」

「え、まあ少し無愛想だとは思うけど……」

「だよねだよね！それより、スクールアイドルやらない!？」

「え、遠慮しておきます……」

~~~~~

高海からの強引な勧誘から脱出し、教室に戻った俺は今、周りの女子に囲まれ、質問攻めという名の拷問を受けていた。

「土井君の好きな物ってなんかある？」

「土井君って前の学校ではどんな感じだったの？」

「土井君って前の学校で彼女とかいた？」

「それ聞いちゃう!？」

と周りの女子が騒がしく質問を投げかける。

「また今度でいいですか？あんまり女子と話すのは苦手です。」

「そんなの気にしなくていいからさ！ねえ、彼女とかいたの!？ねえねえ!？」

「あの、放っておいてもらえませんか？」

『ええ、つまんない!』

つまんなくて結構だ。むしろこっちはあんたたちと話したくもないんだよ。

「何か話そうよ!」

はあ、めんどくさいので屋上に逃げようとする。しかし、周りの女子が邪魔で教室から出ようにも出られない。面倒くさい。

家話&不良

授業が終わり、家に帰宅する。家に帰ると姉の結菜が待っていた。

「ただいま。」

「お帰り〜！抱きついて良い？」

「良い訳がない。むしろなぜ良いと思ったんだよ。」

「ん〜、悠哉が弟だから？」

「余計ダメに決まってるんだろ。」

学校で疲れているのに、この若干ブラコン気味なバカ姉は…

「で、学校はどうだった？」

「疲れた。高海がうるさい。周りの女子がうっとうしい。」

「初めての学校なのに帰って早々愚痴!？」

「そうですね？何か？愚痴を吐くのがそんなに悪いかね。」

「悠哉って本当に無愛想で女の子嫌いなね。悠哉の女の子嫌いって一生直るのかしら？」

「多分一生治らない」

「自分で言う!？それ自分から治す気0だよね!？」

「そう言われたらそうだな。」

「認めた!? せめて治す気ぐらい見せようよ!」

「面倒くさいから良いだろ。どうせ女は女だし。女がくだらない生き物なのは一生変わらないと思う。」

「そんなに女の子嫌い?」

「ああ、嫌いだ。その何が悪いんだ?」

「今日は何でこんなに女嫌いについて色々言われるんだ? 謎である。」

「結婚願望とかないの?」

「ない。」

「はつきり言った! どうしたらこんなに無愛想になるんだか。」

「仕方ないだろ。あんな思い出したくもない過去があつたんだから。」

「嫌々好きになる必要はないけどあんまり拗らせすぎても良いことないよ。」

「はいはい。一応肝に銘じておくよ。」

「悠哉が異常に素直! 何があつたの!?!」

「なんもない。それ以上言うとかわかんないぞ。」

「怖い! 怖すぎる! そんなこと言わないで!」

「はいはい。できる限り気を付けるよ。」

「よろしい。あ、そうだ。夕飯の買い物行ってきてくれる？あと学校で使う筆記用具と
か足りないものがあつたら買ってきたら？」

面倒くさいなあ。まあ確かに学校で使うもので足りないものがいくつがあつたから
ついだと思いますか。

「分かった。じゃあ行ってくるけど夕飯何なんだ？」

「うゝん、今日はカレーにしようかしら。」

「分かった。カレーの材料と学校に必要なものか。ちよつと沼津の方まで行ってくる。」

「お願いね。」

そう言う俺は外に出て、自転車をこぎ進めた。

~~~~~

カレーの材料と学校で使うのに必要な物を買ひ終え、帰ろうとした時に近くで謎の声  
が聞こえた。

「や、やめてください。」

「良いじゃんか。俺らと一緒に遊ぼうぜ。」

ああ、何だ。こんな場所に不良か。治安が悪くなつたもんだな、ここも。めつちやう  
るさいし。

「なあ良いだろ。どうせこの後暇なんだから良かったら良いじゃんか。」

「いえ、もう帰らないと親に心配させてしまうので…」

「はあ、そんなのどうでも良いだろ、そんなん。」

よく見ると不良に囲まれていたのは桜内だった。あいつは何をやっているんだ。

「なあ、調子乗ってんのか？調子乗ってんなら殺すぞ？」

「あんたらうるさすぎ。音楽が聞けないんだけど。」

『あ？』

流石に我慢ならなくらいうるさいので声をかける。

「なんだてめえ？殺されてえのか？」

「殺されたいわけないだろ。頭湧いてんのか。」

「調子乗ってんな、おい。調子乗ってんじゃねえよ、殺すぞ！」

こいつらの頭つばい奴に胸倉をつかまれる。

「てめえ、この人が誰か分かってんのか？」

「いや、知るか。」

「じゃあ、てめえの冥途の土産に教えてやるよ！この方は我ら（サイコパス）のヘッド！網走健吾さんだ！よく覚えて死ぬ！」

なんだそのものすごくダサイチーム名は。ネーミングセンスがないにしても酷すぎる。

「あ、そう。で？」

「ほうほう、俺の名前を知らないうえに挑発とは。舐めてんな、おい。いいぜ。お前、俺とタイマンはれや。」

なんか面倒くさいことに巻き込まれたみたいだ。

「待って、土井君。こんな人に絡んでいったらダメだよ！」

桜内が俺に声をかける。何もできないのに何言ってるんだか。

「うるさいな。どっかに逃げりゃ良いだろ。邪魔。今から俺、こいつとタイマン張るんだってさ。」

「おうおう、威勢だけは良いようだなあ。面白い。遠慮なんかすんなよ。」

遠慮なんてするか。

「待って、ダメ！」

はあ、やるか。

## 喧嘩

今俺は胸倉をつかまれている。ここから相手をつぶすにはこれだな。

「ほら、さっさとかかって来いよ、なあ！」

「ビビッてんのか？あ？」

外野もうるさくて仕方がない。

「遠慮なしで良いんだな。ならば……」

俺は思い切り膝を蹴り上げる。俺の予想通り相手の急所に当たる。

「グッ！」

相手は倒れかかる。その倒れてきた相手の腹にもう一発膝を入れる。

「おらー！」

「ウグッ！」

俺はとどめに顎にアッパーを打ち込む。

「グハッ！」

俺の技が見事に決まり、相手は地面に倒れ込んだ。

「嘘だろ……あの網走さんがこんな奴の蹴りなんかで倒れるなんて……いや、お前、男の

急所に蹴りを入れるのではないだろ！」

いや、遠慮をするなど言ってきたのはそちら側だと思うんだが……

「遠慮をするなつて言つたのはそつちだろ。俺はそれに従つただけだ。」

「暗黙の了解つてもんがあるだろ！」

「うるさいなあ。そつちが遠慮なしでやれつて言うからこうしたただけだろ！ いちやもんつくてんじやねえよ！」

「ヒィー！」

流石にイライラしてきたので少し怒鳴る。

「そしてさあ、あんたらもうこういう事やめろよ。うつとうしいから。それに最近の高校生つてこんなもんまで平気でもつてるんだぜ？」

「そう言つて学校で使う用途で買った新しいハサミを取り出す。そうして倒れたやつ  
の首元に刃先を突き付ける。

「ヒィー！」

「ほら、あぶねえだろ。今俺がお前の首に向けて思いつきり刺したら、お前、死ぬぞ。」

「は、はいー！」

「二度とこんな事すんじやねえ。分かつたな。」

「はい。」

聞こえないなあ

「分かったんなら返事しろ！」

「はい！」

やべ、やってしまった。前空手やってた時のスイッチが入ってしまった。少し冷静になろう。

「とにかく、こんなことは二度とするな。迷惑だ。」

「はい！分かりました！」

少しはこれで懲りてくれればいいんだがな。ということ思いながら後ろを見ると桜内が地面に座っていた。

「…何してんの？」

「あ、いや、別に何もしてないよ…。」

何故こいつは逃げていないんだ。全く。

「お前何で逃げなかったの？」

「あ、いや、腰が抜けちゃって。あはははは…。」

どうやら腰を抜かしたらしい。ババアかお前は。

「邪魔だつったのに。はあ、立てるか？」

一応手を差し伸べる。



が来てくれたのは。彼、土井君は颯爽と私の前に現れた。そして不良の一番強そうな人を蹴り2発とアッパーで倒した。しかも彼はあの不良たちをしつかりとまとめあげてしまった。すごいと思つた。これまでの印象がガラリと変わる。前まではただ怖いと思つていただけだつた。でも、少しだけ、かつこいいとも思つた。こんな地味な私に気を配つて、助けてくれる人なんて東京にいた時には出会えなかつた。そんなことを考えていると、土井君が話しかけてくる。

「…何してんの?」

そう聞かれたので何もしてないと伝える。続けて彼は、逃げなかつた理由を尋ねてきた。まあ、腰を抜かしちゃつただけなんだけれど。しつかりとそう伝えたと土井君はそんな私に手を差し伸べてくれた。きつと立てつてことなんだろう。土井君に立たせてもらった私は感謝を伝える。

「助けてくれて、あ、ありがとう…」

しかし、彼から返つてきたのは驚きの言葉だつた。

「いらぬよ。そんな上つ面だけの言葉。」

「えっ…」

正直、信じられなかつた。ありがとうつて言つて上つ面だけの言葉だからいらぬなんて言われたのは初めてだつた。彼はきつきの言葉を繰り返す。やはり怖いかも。そ

うすると土井君が話しかけてきた。

「なあ、お前、帰るんだろ。危ないし、またこいつらみたいな馬鹿どもに絡まれるといけないから俺のチャリの後ろ乗れよ。」

「あ、うん。じゃあ、お言葉に甘えて、乗せてもらうね。」

彼は本当に分からない。怖かったり、かつこよかつたり、優しかったり。確かにとても無愛想だけど、でも…… 帰りの自転車で色々聞いてみよう。

梨子 Side End

## 梨子の質問

今、俺は桜内を家に送るため、桜内を自転車の後ろに乗せて走っていた。

「本当に助けてくれて、ありがとう。」

「勘違いするな。別に助けた訳じゃない。あと、ありがとうなんて言葉聞きたくない。」

「あ、ごめんね…。」

別に謝らなくても良いんだけどな。

「で、次どこを曲がればいいんだ？」

「あ、次はそこを左に曲がって…。」

そんな感じで桜内に家へ送っていた。すると突然、桜内が

「ねえ、何で助けてくれたの？」

と質問してきた。

「さっきも言ったろ。別に助けた訳じゃない。」

「あ、うん…。」

桜内がとても残念そうな声を出す。

「ただ、あいつらがうるさすぎて耳障りだったただけだ。あと、すっかり捕まらないと落ち

るぞ。」

「あ、うん。そうだね。ありがとう。」

また言ってるよ。言うなって言ってるのに。まあいいか。

「もう一つだけ質問してもいいかな？」

「別にいいけど。何？」

何だろうか。と思つて聞く。

「土井君何か昔に嫌なことでもあつたの？」

突然の質問に驚く。何故そんなこと聞かれなければいけないのか。思い出したくないのだが。

「なんでそう思う？」

「なんか、会つた時からとても冷たい雰囲気で、なんかあつたのかなつて思つて。」

そんなに分かりやすかつたか。でも、会つてまだ一日も経っていない桜内に言う必要は皆無だ。

「ああ、確かに昔には嫌なことはあつた。だが、お前に言う必要もないし、第一、言いたくもない。」

「そ、そつか。でも、何か大変だったら私に相談してもいいからね。今日助けてもらったお礼とかもしたいし。」

「だから助けた訳じゃないって。」

「それでも、私が土井君の助けになれるなら、良いかなって。」

「はあ、こいつはお人好しが過ぎるようだな。まあ別にいいけど。」

「はいはい。じゃあなんかあつたら頼らせてもらいますよ。」

「適当に返す。それに対して桜内は、

「うん、私少しでも土井君と仲良くなつてみたいから。私もなんかあつたら頼らせてもらうね。」

「と言ってきた。はあ、面倒くさいな。全く。」

「勝手にしろ。」

「あはは：：まあいいや：：あ、もうそろそろ家だ。家まで送つてくれてありがとう。」

「じゃあ、また明日!」

「はあ。じゃあな。また明日。」

「そうして、俺と桜内は分かれた。家に帰ると姉さんにこつぴどく叱られた。」

~~~~~

梨子Side

土井君は結局昔のことを教えてはくれなかった。それでも、少しは仲良くなれた。気がする：：家に入るとお母さんが心配そうな顔で近づいてきた。

「どうしたの？こんなに遅くなって…」

「いや、ちよつとガラの悪い人に絡まれちゃつて。でも、土井君が助けしてくれたから大丈夫。」

「土井君つて誰？まさか、浦の星女学院に転校してきたつて言う男の子？」

「まあ、そうだね。」

「まさか、もうお友達になつたの？」

「まあ、ある程度だけど…」

「まさか、梨子、その男の子のこと、好きになつちやつたりしたの!？」

「ま、まだ、そんな、まだ私には早いよ!」

「フフフ。照れちゃつて。梨子つたら!」

「お母さん!」

今、土井君にそんな気持ちがあるのかないのかと言われたら分からないけどまだないと思う。まだ…

梨子 Side End

質問攻め part 2

翌日。俺は昨日の疲れを残したまま、学校へ向かった。だがそこで待っていたものは疲れを増幅させるものであった。

「ねえ、土井君！あの不良グループを倒したって本当!？」

「どうやって!？」

「あいつら、結局どうなったの!？」

何でそのことを知っているんだ？確かあの場所には俺と桜内しかいなかったはず。：
桜内が言ったのか？

「何でそのことを知っている?？」

「千歌が教えてくれたんだよ!？」

高海が？高海はあそこになかったはずだが。

「いたよ!？」

「うわっ!？」

驚いた。自分の近くにいたことにも驚いたが、あそこにいたことにも驚いた。どうかで俺の思っていることが分かったんだよ。

「フフン！悠君の考えることなんて千歌には全部お見通しなんだよ！」

そんなのありか？どこのアニメだよ。

「で？どこにいたんだ？お前。」

「うーんと、悠君とは逆の方向にいたんだ。桜内さんがいたから近寄ろうとしたら、あの不良たちが桜内さんに近寄ってて、隠れてたの。そしたら、悠君が来て、あの不良を倒しちやっただけ。」

隠れてたのか。全く気付かなかった。そんな話をしていると、桜内が教室に入ってきた。

「あ、桜内さん！昨日大丈夫だった!？」

「怪我とかしてない!？」

「あの不良どもに変なことされたりしてない!？」

相変わらず女子というものは騒がしい。

「うん、土井君が助けてくれたから怪我もなかったし、変なこともされてないよ。どうして知っているの?」

まあ、気になるわな。

「高海が近くに隠れてたんだとき。」

「あ、そうだったんだ。全く気が付かなかったな。」

「ごめんね。助けられなくて。」

「別にいいの。あの人たちのすごく怖かったし。土井君がすごかっただけだよ。」

「だよねだよね！悠君ほんとすごかったよ！あの一番強そうな人を簡単に倒しちゃうんだもん！」

そんな簡単じゃない。あの時は運が良かったただけだ。もしあの時、あの男にしっかりと効いていなかったら、やられていたかもしれない。

「あと、桜内、何度言ったら分かるんだ。助けてないって言つたら。」

「あ、そ、そうだったね。ごめんなさい……」

「謝る必要もないだろ。馬鹿馬鹿しい。」

「そんなこと言う必要ないでしょ！悠君は意地悪だなあ。」

別に関係ないだろ。俺は思ったことを素直に言っただけだ。何が悪い。

「はい、ホームルーム始めますよ！」

~~~~~

時間が経ち、放課後になったので帰ろうとする。しかし、外がなんだか騒がしいみたいだ。気になったので外に出て確認してみると、驚きの光景が目に入ってきた。

「うす！悠哉さん！お疲れさまです！カバン持たせていただきます！おら、お前らもぼさっとしてないで働け！」

『うす！』

校門で待ちかまえていたのは昨日ぶっ飛ばした不良たちだった…

## 何故ここに

今俺は信じられない光景を目の当たりにしていた。

「悠哉さん！お飲み物お持ちしました！どうぞ！」

「飲み物とかの前に何でここにお前がいるんだ？」

謎すぎる。まさかストーカーだったりして……警察送りにしようか。

「悠哉さんの来ていた制服は見たことが無かったので、噂になっていた浦の星女学院の共学生のやつかと……」

そんなに有名だったのか。知らなかった。それなら警察送りにしなくてもいいか。面倒くさいし。

「で、悠哉さん！飲み物どうしますか!? コーヒーにしますか!? それともコーラにしますか!? お茶もありますよ！」

「いや、いい。もう自分で飲み物は買ってあるから。」

「マジっすか！」

「ああ、マジだ。」

「騒がしいですわよ！一体この騒ぎは何なんですか!?!」

この声は昨日会った黒髪の生徒会長さんか。確か名前は黒澤ダイヤ先輩だったか？

「あ、悠哉さんですか。あなたが原因ですか!？」

「いえ、こいつらです。」

はあ、面倒なことに巻き込まないでくれよ。だるくて仕方がない。

「悠哉さん！裏切るんですか!？」

は？裏切るってなんだ。

「裏切るも何も、俺は不良になった覚えはないぞ。」

「それはそうですが……って、なんでダイヤがここにいるんだよ!？」

「えっ、健吾さん!？あなたの方こそ何でここにいるんですの!？」

「俺はこの方に一生ついて行くって決めたんだ!？」

何勝手に決めてんだ。嫌だよお前を一生連れているなんて。

「何勝手にそんなことを決めているんですか!？この人に迷惑でしょう!？」

わあ、言いたいこと全部言ってくれた。

「そんなこと、聞いてもないんだからわからないだろ!？そして俺の質問に答えろ!？なんでお前がここにいる!？」

「わたくしはこの学校の生徒会長ですわ!？だからこんな騒ぎが起こっていたら来るのは当たり前ですわ!？あなたはまた悪さばかりしているのですか!？あれだけやめなさいと

「口酸っぱく言っていますのに！」

「うるさい！俺が何をしようと勝手だろ！」

「人様に迷惑をかけてはいけませんわ！」

ちよつと待て。こいつと生徒会長さん、何でこんなに仲いいんだ？

「生徒会長さん、ちよつといいですか。おい、お前、生徒会長さんと、どういう関係なんだ？」

「単なる腐れ縁です。クツソうるさいんですよ、こいつ！どうかしててください！」

「悠哉さんに頼るのは良くないですよ！あなたより年下なんですから！」

「マジっすか!？」

「まずお前の年齢知らん。」

「俺は高3です。」

「そうか。確かに俺の方が年下だな。俺は高2だ。」

「それなのにあんなに強いなんて！俺やつぱあんに一生ついて行きます！」

「やめなさい！悠哉さんに迷惑でしょう！」

なんか…とても面倒くさいな…

## 勧誘再び

あの日から数日。何事もなく平和に過ごしていた。何か変わったことがあるかと言われたら、この学校にスクールアイドルグループ、「A q o u r s」が出来たことだ。あの高海が作った9人のグループのようである。ただ、問題なのはA q o u r sが結成されたことにより俺をマネージャーにしようとするやつが増えたことである。今日もまた一人、俺の元へやってきた。

「悠哉く、おはよう！」

今日やってきたのは松浦果南さんだった。俺と果南さんは昔からの知り合いで、昔はよく遊んでもらったりもした。が、今の俺には関係ない。

「おはようございます。果南さん。」

「悠哉は冷たくなつたね。」

「それはどうも。」

「褒めてないよ。」

ああ、もうこの人は本当に苦手だ。

「悠哉！A q o u r sに入らない？」

「入りません。」

「ええ、そういう悠哉には、ハグッ！」

これだよ。果南さんが苦手な一番の理由は。突然のハグ。しかもこの人は力が強い  
ため、一度ハグされると果南さんが放してくれるまでは絶対に抜けられない。流石に暴  
力で解決するのは良くないと思うし。

「果南さん、放してください。」

「悠哉が入るって言うまでハグする！」

「子供ですか。」

「ム、そういう事言う悠哉は放さない！」

こういう所も苦手な点である。面倒くさい。そんなことを話しているとチャイムが  
鳴る。

「あく、チャイムが鳴っちゃった。仕方ないから放してあげる。」

「ありがとうございます。じゃあ、俺は教室へ行きます。」

「分かった。じゃあね。」

そうして、教室に入る。が、そこにも俺を勧誘するやつが待ちかまえていた。

「悠君、おはよう！そしてA q o u r s に入ろ！ね！」

「悠君、おはヨソロー！悠君もA q o u r s に入ろうよ！」

高海と渡辺の二人である。

「二人とも、あんまりしつこいとそれこそ入ってくれないよ。」

「それもそうだね……でも、悠君には早く入って欲しいんだもん！」

「だからいつも言っているだろう。入らないって。」

正直言つてしつこい。もう飽き飽きしている。

「土井君、いつもごめんね。でも千歌ちゃんも曜ちゃんも土井君にはAqoursに入つて欲しいんだ。もちろん私も入つて欲しいわ。」

「はあ、前までは桜内も俺と同じで入るのを拒んでいたのに今では誘う側に回つてしまったか。」

「ごめんなんて言うな。聞きたくない。」

「あ、そうだったね。」

「あと桜内に入れと言われようと入らないからな。」

「私は強制はしないよ。でも、できれば入つて欲しいなつて思つて。」

「悠君、何でそんなにAqoursに入るの嫌なの？」

「決まっている。女嫌いだから。そして面倒くさいから。主にその二点だ。」

「別になんでも良いだろ。お前には関係ないんだから。」

「そう、関係ない。お前らには関係ない。」

## 入部

「関係なくないよ！」

桜内はそう言った。意味が分からない。俺が女嫌いであることに桜内は全く関係がないじゃないか。

「なんで関係なくないなんてことが言えるんだ？」

「だって、私と土井君って、もう友達でしょ！」

いつからそんな物になったんだ。確かに挨拶とか世間話程度はよく話していたが、俺は桜内と友達になった覚えはない。

「俺は友達になった覚えはないぞ。」

「え、そうだったの？」

「ああ、そうだ。まず、何を持って友達と定義するんだ。」

「それは分からないけど、でも、土井君、私と話す時、なんか、少しだけだけど笑顔だったような気がしたから、てっきりもう友達になれたんだと思ってたんだ。」

そうだったのか。俺は桜内と話している時、笑顔だったのか。そんな関係ならもう友達なのか。

「でも、土井君はそう思っていないかったんだね。少し悲しいかな。」

「悪かった。その関係が友達ならば、俺と桜内は友達だ。だとしてもだ。いくら友達と言えども俺がそのスクールアイドルグループに入るのに関係があるか？」

「そうだ。いくら友達と言えども俺が女嫌いであることに桜内は関わりはない。」

「土井君さ、昔に嫌な出来事があったんでしょ。友達だったらさ、聞ける悩みって言うのがあるんだよ。前言ったでしょ。大変だったら私に相談してねって。悩みがあるんだったら一人で考え込まないで私とかに相談してよ。私にできることだったらなんでもするから。」

「悠君が悩んでいるなら千歌たちも助けるよ！だからAqoursに入ってくれない？」

「そうか。そうだったのか。悩みは一人で抱えていたらいけないのか。みんなで分かち合えばいいのか。」

「私も悠君を助けてあげるよ！なんでも曜ちゃんにお任せあれ〜！」

「ほら、千歌ちゃんも、曜ちゃんも、Aqoursのみんなも、もちろん私も、土井君の味方なんだよ。だから私たちに頼って欲しいな。」

「なんだ。頼ってよかったのか。はあ、意固地になつてた自分が馬鹿みたいだ。」

「ダイヤさんと鞠莉ちゃんに聞いたんだ。土井君が女の子が嫌いなこと。それでもい

い。ただ、土井君の力を少し貸してくれないかな？そしたら私たちのパフォーマンスも良くなると思うんだ。だから、もしよければ、Aqoursに入ってくれないかな。」

「桜内、お前、強制はしないって言ってたよな。結構強引な気がするぞ。」

「そうだった？だったらごめんね。」

「その言葉はいらぬ。あと、俺が入ってもやれることは少ないと思うぞ。」

「大丈夫！悠君パソコン使うの上手だったから、PV作成とかできるんじゃないかな？」

「多分迷惑ばかりかける。」

「大丈夫！この曜ちゃんが助けてあげる！」

「こんな俺でも、スクールアイドルのマネージャーが出来るのか。」

「できるよ！千歌が出来たんだもん！悠君なら簡単に出来ちゃうよ！」

「そうか。じゃあ、これから、よろしくお願いします。」

『よろしくね！』

この日、俺はスクールアイドル、「Aqours」のマネージャーになった。

## 予備予選orピアノコンクール

俺がAqoursのマネージャーになってしばらくが経った。Aqoursは順調と言っているほど進んでいった。そしてAqoursは夏休みを利用し、ラブライブ予備予選へ向けて特訓がてら合宿を行っていた。まあやることはつぶれかけの海の家を手伝う事なのだが。俺は海の家で料理を作っていた。

「悠君、焼きトウモロコシとイカ焼き出来た？」

「ああ、できたぞ。渡辺の方は？」

「悠君、Aqoursに入ったからみんなの名前で呼ぶって約束したでしょ！」

そう言えばそうだった。面倒くさい。

「はいはい。曜。これでいいか？」

「うん！こつちはできているから、ルビイちゃんか花丸ちゃんに渡して。」

「分かった。」

「ルビイ、花丸、トウモロコシとイカ焼き終わったぞ。持っていつてくれ。」

「分かりました。今行きます。」

「悠哉君、次、ラーメンずら。」

「おう、分かった。」

正直ここでの仕事は楽しい。料理を作るのは好きだし。

「ラーメン出来たぞ。」

「今行くぞら！」

「今行きます！」

~~~~~

夜

みんなが寝静まったころ、誰かが外へ出ていく音がした。もちろん俺は別室だ。少し無理を言ったが女嫌いが治ったわけではないので仕方がない。それよりもこんな時間に出ていくなんて変だ。部屋から出てよく見てみると千歌と梨子だった。気になって外へ出てみる。

「ばれちゃったか。」

何の話だ。ばれるって、なんか隠し事か？

「でも大丈夫だよ。予備予選にはちゃんと出るから。」

「おい、桜内、何を隠しているんだ。」

「あれ？悠君、どうしたの？」

「お前らが外出ていくのが見えたんだよ。」

「そうなんだ。なんかごめんね。」

「そんなの別にいいから。さっさと何隠しているのか言え、桜内。」

「悠君、梨子ちゃんも名前ではばなきやダメだよ！」

「分かった分かった。で、梨子？お前は何を隠してる。」

「悠君、言い方がきついよ！」

少し位良いだろ、別に。

「ピアノのコンクールがあるの。予備予選と同じ日に。」

そうか。それで最近少し元気がなかったのか。

「でも、私、ラブライブ予備予選の方に出るから。安心して。」

「そうか。」

俺がとやかく言う筋合いはないな。

「うん。」

「私はピアノコンクールに出てほしいな。」

「千歌ちゃん？」

「私は、スクールアイドルをやって梨子ちゃんがもう一度ピアノに前向きに取り組めたらいいなって思ったの。」

「...」

「だからね、私はピアノコンクールの方に出てほしいな。」

「本当に千歌ちゃんって変な人。」

「梨子ちゃん！」

「私、ピアノコンクールに出る。」

「そうか。気を付けてな。」

「そうだ！悠君も梨子ちゃんについて行ってあげてよ！」

は？なんでそんな面倒くさいことを俺がしなければならぬんだ。

「なんで俺が東京に行かなきゃいけないんだ。」

「そうだよ！私はピアノコンクールがあるからともかく、悠哉君は関係ないじゃない！」

「だって、梨子ちゃん、悠君がいた方がやる気出るでしょ。スクールアイドルの練習も悠

君が入る前よりも良くなった気がするもん！」

「千歌ちゃん、それ以上言っちゃダメ！」

そうなのか。一応少しは役に立てているんだな。

「悠君、これはA q o u r sのリーダーの千歌の命令だよ！だから、梨子ちゃんと一緒に

東京に行つてきなさい！」

「なんでそんな…」

「行つてきて！」

「少しは人の話を…」

「行かないなら悠君の話は聞かないもん！」

何なんだこいつは。ガキのように駄々こねて。

「どうしても行かないって言うなら鞠莉ちゃんに頼んでヘリコプターで無理矢理…」

ちよつと待て。そんなことまでするのか、こいつ。しかも鞠莉先輩の家はお金持ちらしいし、何よりあの性格だから実際にやられかねない。そうなるともものすごく面倒くさくなりそうだ。それは嫌である。

「分かったよ。ついて行けばいいんだろ。」

「うん！じゃあ、梨子ちゃんをよろしくね。」

「待って、私の意見はどうなるの!？」

「悪いがこいつのわがままを素直に聞け。そうじゃないととても面倒になる。」

「ええ、まあいいわ。じゃあ、悠哉君、よろしくね。」

「よろしく。」

面倒くさいが仕方がない。行くしかない。

T O K Y O

千歌の強引な命令により、俺は梨子のピアノコンクールに付き添うことになり、今、東京にいた。

「悠哉君、本当に良かったの？ 私についてきて。」

「仕方ないだろ。そうじゃないと千歌と鞠莉先輩に何されるか分からなかったんだから。」

「そう、仕方なかったのだ。俺だつてこんな人の多い所にはあまり行きたくない。ただ、鞠莉先輩が出てくるとものすごく面倒くさいことになるので仕方がない。」

「まあ、そうだけど、迷惑じゃない？」

「別にもうここまで来たんだからもういいよ。」

「そっか。じゃあ、よろしくね。」

何をよろしくすればいいのか。まあ適当に返しておこう。

「ああ、よろしく。もうすぐ夜だから予約してあるはずのスタジオに行こう。」
「そうだね。」

~~~~~

スタジオ

スタジオに到着すると、そこの人から驚愕の一言を伝えられた。

「すみません。もう、桜内梨子様のお部屋以外、空いていません。」

嘘だろ、おい。じゃあ、俺はどうすればいいんだ。そう思いながら、スマホを開き、近くで空いてそうな旅館を探す。

「ええ、そんな！悠哉君はどうしたらいいんですか？」

「そう言われましても…。」

「梨子、大丈夫だ。今どっか泊まれそうな旅館探しているから…。」

だが、あんまり空いていないようだ。空いていてもとても手が出せそうにないほど高いホテルだった。さて、どうしようか。

「チツ。なかなか空いてねえな。」

「大丈夫？どうしたらいいんだろう…。」

「えっと、お部屋ですが、あなた方が良ければ二人ぐらいだったら入れると思いますか…。」

は？何言ってるんだこいつ。できるわけないだろ。男女がひとつ屋根の下で寝る？梨子がOKするとは到底思えない。俺も乗り気ではない。

「ええ、いくら何でもそれは…。」でも、それ以外に方法はないし…悠哉君はそれで大丈夫

夫？」

「俺が良くても梨子がダメだろ。」

「うん、悠哉君がいいなら、いいけど……悠哉君は変なことしないだろうし……」

それでいいのよ……まあ、あんまり良くないが泊まれる場所があるわけでもないの  
で泊まるしかないか。

「はあ、仕方ない。梨子、それでいいか？」

「うん。」

「じゃあ、お部屋にご案内いたします。」

~~~~~

部屋

「こちらです。」

部屋に案内されて、部屋の中に入ると色々な設備が整っているように見えた。

「案外いい部屋だな。」

「そうだね。ピアノもあるから練習もできるし。ちよつと練習しようかしら。」

「そうか、じゃあ、俺は先にシャワー借りてもいいか？少し汗かいていて気持ち悪いか
ら。」

「うん、いいよ。」

「じゃあ、私はフロントに戻ります。何かあったら、フロントまでお越しく下さい。」
 「ちよつと待て。見た感じだとベッドが一つしかない。だから布団を用意してくれ。」
 「分かりました。少しお待ちください。すぐ用意いたします。」
 「頼む。」

そう言うのと、俺はシャワールームに入る。

~~~~~

数十分後

シャワーを浴び終えて、シャワールームから出る。ただ、少し変である。さつきまで聞こえていたはずのピアノの音が聞こえない。もう終わったのか。

「いいな、私もされてみたいわ。こんな事。」

「何しているんだ？ 梨子？」

「へ、わわー！」

梨子はピアノの練習を終えたのか、何か本を読んでいた。本のタイトル部分にはアゴクイと書かれていた。

「いや、ち、違うの！ これは、そ、その、が、学校の友達に預かって、ちよつと中を覗いただけだよ！」

「私もされてみたいって言ってたのは俺の聞き間違いか？」

「あ、あわわわわ！聞こえちゃってただら、恥ずかしい／＼／悠哉君には内緒にしておきたかったのに：。」

「悪かったよ。勝手に見て。それ、内緒にしておけばいいんだな。」

「えつ：。」

まあ、梨子の秘密をばらしたところでなんの利益もないし。面倒くさいし。

「えつ、じゃわかんないだろ。何も言わないんだつたら。A q o u r s のやつらに言うぞ。」

「あ、うん。じゃあ、秘密にしておいてください：。」

「分かったよ。もうピアノの練習はいいのか？」

「うーん、もうちよつと練習しようかな。じゃないと明日のコンクールで前と同じような結果になったら嫌だし：。」

「そうか、あまり遅くなるなよ。明日日本番なんだろ。今日根詰めすぎて明日まともな発表できなかつたら元も子もない。」

「うん、なるべくそうするね。」

「あと、ピアノの練習が終わってもさっきの本読んでんよ。終わつたらシャワー浴びてベッドで寝ろ。」

「わ、分かっているわよ！」

本音はどうだかね。

「そう、ならいいけど。あと、今からコンビニ行ってくるけど、なんか欲しいもの、あるか？」

「あ、うーん、特にないかな。」

「分かった。じゃあ、行ってくる。」

そうして俺はコンビニに向かった。

~~~~~

梨子Side

悠哉君にばれてしまった… 悠哉君だけには本当に内緒にしておきたかったのに… でも悠哉君はやはり優しい。あんな本を読んでいたら普通、気持ち悪いとか言われるものだと思っていた。嫌われると思っていた。それなのに悠哉君はみんなに秘密にしてくれると言ってくれた。しかも私の身体を気遣ってくれた。そんな彼のためにも、今回は失敗できない。これで失敗したら彼に合わせる顔がない。頑張らなくちゃ。私のためにも、Aqoursのためにも、そして、悠哉君のためにも…

梨子Side End

梨子の決意

梨子 Side

朝、携帯のアラームが鳴って起きた。しかし、寝ているはずの悠哉君がいない。どこへ行ってしまったのだろうか。分からない。私が寝ている間に出て行ってしまったのかも知れない。そう思うと、不安が一気に押し寄せてきた。そんなことを考えていると、部屋のドアが開いた。

「起きたか。梨子。」

ドアを開けて入ってきたのは悠哉君だった。突然入ってきたので少しびっくりしてしまった。

「あ、おはよう、悠哉君。さっきまでどこ行ってたの？」

「調理室。」

調理室？なんでだろう。

「どうして、調理室に行ったの？」

「お前の昼用の飯作ってただけだ。サンドイッチでいいよな。千歌から梨子がサンドイッチが好きだって聞いたし。」

悠哉君が朝いなかった理由は、私のお昼ご飯を作っていたかららしい。本当に優しいな、悠哉君は。

「あ、ありがとう！私、サンドイッチ、好きだから、うれしい。」

「そうか、ならよかった。さっさと身支度して会場へ向かうぞ。そうじゃないと間に合わなくなる。」

「うん。」

~~~~~

### 会場

私たちはあれから身支度を済ませ、会場にいた。今の私はとても緊張している。また、前のようにになったらどうしよう。怖い。また失敗してしまう。ずっとそんなことを考えていた。

「梨子、緊張しているのか。」

悠哉君が話しかけてきた。

「うん：： やっぱり：： 私にはできないよ：：」

「そうか。おい、ちよつと椅子に座れ。」

「え？」

「早くしろ。時間なくなるぞ。」

「あ、はい！分かりました！」

そうすると悠哉君は私の肩に手を置いた。

「え、ええ〜!?ゆ、悠哉君、何しているの!?!」

「少し静かにしろ。マツサージだ、マツサージ。ネットに落ちてたんだよ。緊張している奴がいたらマツサージしてやれって。」

「そ、そうだったんだ。」

「どうせ梨子は緊張するんだろうと思っていたからな。」

「そ、それはどういう意味!?!」

「なんの意味もねーよ。ほら、段々と緊張がほぐれてきただろ。」

そう言えばそんな感じがする。肩も軽くなっていた。

「わかんないけど、お前はピアノの練習、すっかりやったんだろ。だったらできるんじゃないの。あとは気合と根性でどうにかしろ。俺は観客席で見てる。」

「ありがとう、悠哉君。」

「そんなこと言ってる暇あったら少し腹に入れとけ。」

そう言うと、悠哉君は観客席へと向かっていった。彼が去ったあと、私は悠哉君が作ってくれたお弁当の蓋を開けた。中にはたまごサンドとカツサンドが入っていた。カツサンドを手に取り、口に入れる。

「あ、美味しい。」

とても美味しかった。それから少し経つと、係の人が私のところに来た。

「桜内梨子さん、出番です。」

「分かりました。」

そう言つて私は席を立つ。そして舞台のピアノの席に向かう。私ならできる。悠哉君ができるつて言つてくれたんだ。なら、それに答えなきや。そうして、私はピアノを弾き始めた。

~~~~~

ピアノコンクール後

ピアノを弾き終えた。結果は大成功と言えるぐらいのものだった。でも、この結果が出せた一番の理由はやっぱり、悠哉君が助けてくれたからなんだと思う。そう思うと急にドキドキしてきた。なんでだろう。

「お疲れ様。」

「ゆ、悠哉君!？」

悠哉君が私の元に歩いてきていた。ただ、それだけなのに彼の顔を直視することが出来ない。私は一体どうしたのだろう。

「お前、顔赤いぞ。風邪引いていたのか？」

そんなことを言いながら、悠哉君は私のおでこに手を当ててくる。

「だ、大丈夫だよ！」

「そうか、それならいいが、無理はするなよ。」

「うん、ありがとう。」

そう言つて彼は少し離れる。なんだかとても心臓がバクバク言っている。これがいわゆる《恋》なのだろうか。思い返してみると、いつも悠哉君のことを考えていた。早く明日になつて悠哉君に会いたいと思つていた。そうか、これが《恋》なんだ。私を不良から助けてくれた時からずっと悠哉君に《恋》をしていたんだ。私は悠哉君のことが好き。きつとこれは変えようのない事実なんだ。この気持ちを悠哉君に伝えたい。決めた。内浦に帰つたら、告白する。

梨子 Side End

買い物デート？

梨子のピアノコンクールが終わり、内浦に戻ってきた翌日。俺は梨子に沼津のショッ
ピングモールに買い物に誘われていた。

「お待たせ！遅れてごめんね！」

梨子がやってきた。

「別に時間通りだろ。俺が少し早く来たただけだ。」

その理由は、姉さんが女の子を待たせるなとうるさかったので、早めに出てきただけ
だった。

「そうなんだ。じゃあ、行こっか。」

そう言うと、梨子は俺の手を握ってきた。

「なんだよ、梨子。」

「あ、嫌だった？」

「別に嫌ではないけど、突然だったから驚いたただけだ。」

「じゃあ、手をつないでいてもいいでしょ。」

「はあ、別に好きにすれば。」

「ふふ、ありがとう。」

そうして、俺らはショッピングモールへと向かった。

~~~~~

ショッピングモール

俺らはショッピングモールに着いた。やはり広い。さて、まず梨子はどこへ行きたいのか。

「で？まず最初にどこに行くんだ？」

「まず最初はお洋服を見たいかな。」

「じゃあ、さっさと行こう。」

「うん。」

歩きながら梨子と話す。

「お前、疲れていないのか。」

「そりゃあ、少しは疲れているわよ。」

「じゃあ、今日は休んだ方が良かったんじゃないのか。」

「でも、悠哉君とお買い物に行きたかったから。」

なんだそれ。それなら休んだ方が絶対良いだろ。

「はあ、何それ。意味が分からん。」

「なんでも良いでしょ。ほら、お洋服屋さんに着いたよ。さあ、入ろ。」  
「おう。」

梨子の中には中に入ると色々な服を手に取っていく。

「あ、これかわいいなあー。あ、こっちもかわいい。あっちも良いなあ。」  
そんな感じで梨子は色々な服を見ていた。

「悠哉君、ちよつと試着してみるから、どっちがいいか見てくれない?」

「俺は服のセンスはないからあまり参考にならないぞ。」

「良いの! 私は悠哉君の意見が聞きたいの!」

何でそんなに俺にこだわるのだから。

「分かったよ。どっちか選べばいいんだな。」

「うん!」

何でそんなにうれしそうなんだよ。意味が分からん。

「じゃあ、着替えてくるね!」

「おう。」

数分後

「一着目がこれだよ。」

梨子が着てきたのは薄い水色の花柄のワンピースだった。

「ちよつと待つてね。次の服着るから。」

そう言つて梨子は試着室のカーテンを閉める。そしてまた数分後。

「お待たせ。二着目はこれなんだ。」

そう言つて着てきたのは白いワンピースだった。結局どつちもワンピースじゃないか。

「さっきのと今の、どつちがいいかな？」

正直どつちでもいいのだが。

「それ、俺が選ばないといけないのか？」

「だつて、悠哉君しかいないじゃない。今日折角買いに来たんだから選んで？」

「分かつたよ。別にどつちでもいいがどちらかと言われたらあとの白い方がいいんじゃないか。」

「そつか、じゃあこつちにするね！悠哉君は服選ばないの？」

「別に今欲しいと思わないからいい。」

「じゃあ、私が選んでも良い？」

「は？」

人の話聞いていたのか。俺はいらないつて言つたんだぞ。

「私が選ぶの嫌だ？」

何でそう言う風に言うかな。そう言われるとこっちが悪役がみたいで断れなくなる。

「チツ、好きにすればいいだろ。」

「じゃあ、選んでくるね!」

はあ、面倒くさいと思ったらありやしない。そして数分後。

「これなんてどうかかな?」

梨子が持つてきたのは、黒いボーダーラインのTシャツだった。

「ふーん、別にそれでいいんじゃないか。」

「じゃあ、悠哉君試着してみようよ。」

「は?」

何でそこまで... もうそれでいい。正直そう思う。

「私だつて試着したんだから、悠哉君も試着してきて!ほら、早く!」

そう言いながら梨子は俺の背中を押した。

「はあ、分かった。分かったから押すな。」

「はーい。」

そして俺は試着室で梨子の選んだ服を着て試着室のカーテンを開ける。

「梨子、これでいいか?」

「わあ、とても似合っているよ!」

お前が選んできたんだろ。

「じゃあ、これも買うよ。おい、さっきのワンピース貸せ。」

「え? どうして?」

「どうでも良いだろ。さっさと渡せ。」

「う、うん...」

梨子からさっきのワンピースを受け取った俺は足早にレジへ向かう。

「すみません、これください。あと、これ分けてください。」

そう言ってレジに商品を置く。

「かしこまりました。えーっと、合計で1万円になります。」

1万か、やっぱり服はなかなかするな。そんなことを考えていると梨子が話しかけてきた。

「え、私の分は私がお金払うよ!」

「いいよ、これでお願います。」

そう言つて1万円札を財布の中から取り出す。

「分かりました。ちょうどお預かりいたします。はい、どうぞ。レシートはどうしますか?」

「お願います。」

「はい。レシートです。」

「ありがとうございます。」

そうして店の外へ出た。

「悠哉君、私の分は私が出すよ!」

まだ言ってるよ。面倒くさい。

「良いって言ってるだろ。バイトしてるからある程度の金はあるんだ。あれくらいどうってことない。」

「そ、そっか。じゃあ、お言葉に甘えるね。」

さっさとそう言えればいいのに。と思つて腕時計を見るとちようどお昼時だった。

「もう昼飯の時間だな。おい、フードコート行くぞ。」

「うん。」

そうして、フードコートに着いた。

「混んでるな。」

「そうだね。あ、あそこ空いてるね。行こっか。」

「おう。」

そうして見つけた席に座る。

「梨子は何食べる?」

「うくん、何にしよかな。あ、あそこのパスタ屋さんにしよかしら。」

「そうか、だったらこれで足りそうだな。」

そう言つて財布から1500円を取り出す。

「え、いいよ。さっきだつて出してもらったんだし。」

「面倒くさいから使え。こういう時は男が出すんだろ。」

「でも。」

「でもとかいいから。ほら、使え。」

「分かった。ありがとう。」

そして、俺と梨子の料理が揃い、食べ始める。

「悠哉君、少しそつちのもらつてもいい？」

「ああ、いいけど。」

そう言うと、梨子は口を開けた。

「…何してんの？」

「えっ、こうしたらあーんつてしてくれるかなつて。」

どうしてそう思つたんだよ。

「してくれない？」

梨子は上目遣いで俺の事を見てきた。

「チツ、ほら、口開けろ。」

「う、うん。」

そして梨子の口の中に入れる。

「あ、ありがとう。美味しいね。あ、じゃあ、私のもあげるね。はい、あーん。」  
「え?」

今度は梨子がかつちにあーんしようとしてきた。

「俺はいいよ。」

「いいじゃない。ね?口開けて?」

そうしてまた上目遣いでかつちを見てきた。

「はあ、分かったよ。」

そうやって梨子のパスタを口の中に入れた。

「ん、美味しいな、これ。」

「そうだよね!」

そんな話をしながら昼飯を食べ終える。食べ終えた後も俺と梨子はシヨツピングを続けた。

~~~~~

夕方

俺らはシヨツピングを終え、梨子を家に送った。

「悠哉君、ちよつといいかな？」

「なんだ。」

「こつちに来てくれる？」

梨子に言われて梨子について行く。梨子につれていかれた場所は梨子の家の前の海岸だった。

「まず、この前のピアノコンクールはついてきて色々助けてくれてありがとう。」

「別に助けた訳じゃない。ついて行ったのも千歌がわがままを言ったからだ。」

「それでも、悠哉君は私に色々してくれた。悠哉君がいなければこの前のピアノコンクール、成功していなかったと思う。」

「はあ、今日の梨子は少し変である。」

「分かったよ。助けになれてよかった。それで？」

「だから、せめて、ありがとうって言わせて。」

「分かったよ。どういたしまして。」

「うん。そしてね。もう1個言いたいことがあるの。」

「なんだろうか。」

「何？」

「私、悠哉君のことが好きです。悠哉君があのような不良から私を助けてくれた時から。だから、私と付き合ってくださいませんか？」

梨子の告白

梨子 Side

「私、悠哉君のことが好きです。悠哉君があ不良から私を助けてくれた時から。だから、私と付き合ってくださいませんか？」

言ってしまった。つい、雰囲気良かったから言ってしまった。でも私と悠哉君は会ってまだ3か月ぐらいしか経ってないのに告白しちゃった。私は何やっているんだろう。そんなことを考えていると、悠哉君が口を開いた。しかし、それは私にとってもつらい言葉だった。

「おい、梨子。そういういたずら、やめておいた方がいいぞ。」
「えっ……」

最初は何を言われたのか分からなかった。

「えっ、じゃねーよ。そういうようないたずらをするなって言ってるんだ。人によってはそのいたずら信じるやつだっているんだから。」

違う。私はいたずらで告白したわけじゃない。

「私はいたずらで悠哉君に告白したわけj.:.:」

「そういうセリフはいいよ。くだらない。そりや相手をだまそうとしているやつが、すぐにはいたずらでしたなんて言うわけがないだろ。そんなことをすぐ言うようなやつはただの馬鹿だ。」

「なんでそんなこと言うの？」

私の目からは涙がぼろぼろと落ちていった。

「はあ、お涙頂戴かよ。別に。深い意味はねーよ。」

「それなのになんで…？」

「はあ、なんだっていいだろ、別に。」

「私は本当に悠哉君のことが好きd…。」

私がそう言おうとすると、また悠哉君から私にとってとてもつらい言葉が飛んできた。

「なあ、そんなに俺のこと、だましたいのか？」

「えっ…。そ、そんなつもりじゃ！」

もちろんそんなつもりはない。私は悠哉君のことが好きなだけなのに…。

「そんなこと言われたっていたずらつてばれてんのにそこまでやろうとするってことは、俺のことだましましたって思ってるってことなんじゃないのか？」

「違うよ！なんでそんなこと言うの？もういい！悠哉君のことなんて知らない！」

？だ。そんなこと一ミリも思つてなんかいない。やっぱり悠哉君のことを今すぐ諦めるなんてできない。でも、今の私にここにいることはできなかった。つらくて。そんなことを考えながら涙を流しつつ、家の方へ走つてしまった。

「あく、やっぱり梨子ちゃん悠君に振られちゃったね。うんうん。計画通り。あともうちよつとで悠君が私のものに……ふふふ！顔がにやけちゃう！悠君が私のものになつたらまずなにしようかなあく。やっぱり初デートはお買い物とかいきたいなあ。」

私が悲しみに暮れているとき、黒い影が悠哉君と私に一歩一歩近づいていた。

梨子 Side end

梨子が見たもの

梨子 Side

私が悠哉君に振られてから、私はしばらくの間、自分の部屋に引きこもっていた。食べ物もろくにのどを通らず、ずっと部屋で泣いていた。彼のことを忘れようとしてもやはり頭の中で悠哉君のことを考えてしまう。初めて彼に出会った時のこと。私が不良に絡まれたときにそこから助け出してくれたこと。皆で彼を A q u o u r s に誘った時のこと。ピアノコンクールの時に東京までついてきてくれたこと。一緒に買い物に行った時のこと。今でも鮮明に思い出すことができる。彼といるときは本当に楽しかった。少し無愛想だけれども、優しく、かつこよくて。でもそのようなことを思い出すたび、振られた時の言葉が聞こえてくる気がする。そう思うとやっぱり悲しくなってしまうていた。でも、それよりもあの時のことを思い出させるのは、一緒に買い物に行った時に買ってもらった、あの白いワンピースだった。あの白いワンピースを見るたび、心が締め付けられる。

「梨子、ちよつといい？」

お母さんの声だ。何だろう。そう思って、お母さんのもとへ行つた。

「ちよつと、買い物に行つてきてくれない？沼津のショッピングモールまで。」

正直行きたくない。あそこに行くともた振られた時のことを思い出してしまふから。

「お母さん、ごめん。あそこはちよつと行きたくない。」

そう言うとう、お母さんは、

「あんまり引きこもつてたら体に良くないわよ。何かつらいことがあつたのはわかるけど、それでも引きこもつてちゃダメ。最近全く外出でないんだから、少しは外に出なさい。お母さん、ちよつと行かなきゃいけないところがあるから、行つてきてくれない？」
と言われた。

「わかつた。行つてくる。」

仕方がないので、行く支度をしようと、自分の部屋に一回戻る。と、その時、私の目に入つてきたものは悠哉君が買つてくれたあの白いワンピースだった。このままだと使う機会がなくなってしまう。せつかく悠哉君が選んで買つてくれたんだし、着てみようかな。

~~~~~

支度を終え、外に出る。そのまま沼津のショッピングモールへ行こうとすると、千歌ちゃんと曜ちゃんに会つた。

「あ、梨子ちゃん！どうかしたの？最近外で会わなかつたけど……」

曜ちゃんが心配してくれる。

「何でもないよ。ちよつと外に出てなかつただけ。」

「あ、梨子ちゃんそのワンピース、新しく買ったの?」

と、千歌ちゃんが質問してくる。

「ううん。この前悠哉君と買い物に行ったときに買ってもらったの。」

「そうなの!?!いいな。」

と、千歌ちゃんがうらやましそうな目でこつちを見てくる。

「そうだ、今から沼津のショッピングモールに行くんだけど、一緒に来ない?一人だと、少し寂しいから。」

と言って二人を誘ってみる。

「いいの!?!じゃあ、千歌行く〜!」

「じゃあ、私も梨子ちゃんについていくであります!」

「ありがとう。じゃあ、行こう。」

『うん!』

そうして3人でショッピングモールへ向かった。

~~~~~

今、私達はショッピングモールである程度買い物をし終わって、私はお手洗いへ行つ

ていた。お手洗いが終わり、千歌ちゃんと曜ちゃんが待つ休憩スペースへ向かう途中で、私は見てはいけないものを目にしてしまった。

「おい、あんまり、引っ付くなよ。暑苦しい。」

「え、いいじゃん。最近悠哉と一緒に面白い物に来る機会なかったんだから。こういう機会じゃないと悠哉に抱き着けないし。」

私が見てしまったもの。それは、悠哉君と、悠哉君の腕に知らない女性が抱き着いている姿だった…

梨子Side end

verl 純粹梨子ストーリー 眞実

梨子Side

私は見てしまった。悠哉君が女の人と腕を組んで歩いている姿を。きつとあの女性
は悠哉君の彼女さんだ。多分年上でとてもきれいな人だな。胸も大きいし。きつと悠
哉君もそういう女の子のほうが好きなのかな。やっぱり地味な私が悠哉君に恋をする
なんておこがましかったのだろう。それでも、悲しいという気持ちはどうも膨らんで
くる。胸がはち切れそうな思いだ。今ここで泣き出してしまえばいい。これ
以上彼のことを見続けてしまうと、悲しくて思わずこらえていた涙があふれ出してしま
いそうなので、千歌ちゃんと曜ちゃんのもとへ戻ろうとする。しかし、その時、不意に知
らない人に声をかけられた。

「あなたが桜内梨子ちゃん？悠哉から聞いてたよりもずっとかわいいね。ちよつと私と
お話、しない？」

話しかけてきたのはさつきまで悠哉君の腕に抱き着いていた女性だった。

~~~~~

シヨッピングモール内のカフェ

私は千歌ちゃんと曜ちゃんに少し用事ができたことを連絡し、さっきの悠哉君の彼女と思わしき人の前に座った。

「まだ名乗ってなかったね。私は土井結菜。今大学2年。よろしくね、桜内梨子ちゃん！」

ん？今この人、土井って言った？確か悠哉君も土井だったような…。しかもさつき悠哉君がどうか言ってたような気がするし…

「えっと、土井、さんですか？」

「うん、そうだよ。気軽に結菜って呼んでくれていいよ。」

「あ、はい。結菜さん。えっと、まず一つ質問いいですか？」

「うん、いいよ。遠慮しないでいいからね。お姉さんがなんでも聞いてあげるから！」

なんか思ってた感じと違って優しい人だな。

「えっと、結菜さんって悠哉君とどういう関係なんですか？」

最初から何を聞いているんだと言われたらその通りだけど、でもやっぱり気になる。

「うーん、兄弟だよ。悠哉は私の弟。」

「えっ。」

驚いた。とても仲いいからずっと彼氏彼女の関係だと思ってた。

「本当のことだよ。あれれ？梨子ちゃんは何を想像したのかなあ？言わないとくすぐっちゃうよ〜！」

「あ、いや、なんかとても仲がいい気がしたので恋人なのかなって。」

そう言うのと結菜さんは大きな声で笑った。

「あつはつはつは！全然違うよ〜！」

「そうなんですか。結菜さんが悠哉君に抱き着いてたので勘違いしちゃいました。」

「ああ、それは私がちよつとブラコンなだけ。」

「ええっ!？」

それ自分で言っちゃうの!？」

「まあ、ブラコンって言っても悠哉が他の女の子と付き合ったりするのは禁止、とかじゃないけどね。悠哉が幸せになってくれればそれでいいの。」

うん、優しいお姉さんだな。悠哉君が少しうらやましく思えた。

「じゃあ、こつちからも一ついい？」

「あ、はい。大丈夫ですよ。」

「梨子ちゃん、この前の日曜日、悠哉に告白して振られたでしょ。」

この前の日曜日。それは私が悠哉君に振られたあの日だ。でもなんで知っているんだろう。悠哉君が言ったのかな？

「なんで知っているんですか？」

「別に悠哉が言ったわけじゃないよ。悠哉の反応でわかるの。」

「えっ？」

「いったいどういうことだろう。」

「悠哉ね、小学4年生あたりから癬ができたの。」

「その癬っていうのは？」

「唇を噛んだままため息をつくの。しかも決まって女の子に告白されたとき。それまではそんなこと全くしなかったのに。」

「ど、どうしてですか？」

「思わず続けて聞いてしまう。」

「それ、聞く？」

「えっ？」

「なんでその癬がついたかっていうのは、悠哉の過去が原因なの。でも、それは梨子ちゃんにとってつらいかもしれない。それでも聞く？」

「私にとってつらいかもしれない。でも、今の私にはそんな関係ない。」

「聞きます。教えてください。悠哉君の過去について。」

梨子 Side end

## 悠哉の過去 その1

「ここ、内浦には一人の少年がいた。少年の名前は土井悠哉。悠哉はとても元気な子で、周りにはいつも友達に囲まれていた。」

「おいしい！千歌！曜！果南！一緒に遊ぼうぜ！」

「あ、悠君！何して遊ぶの？」

「うーん。鬼ごっこ？」

「ええ、もう鬼ごっこ飽きたよ！他の遊びしよ！」

「じゃあ、何すんの？」

「私、ドッジボールしたい！」

「それは人数的に無理だよ、曜。あと悠哉！私は悠哉よりも年上なんだからね！ちゃんと『けい』を払わないといけないの！」

「ええ、めんどくさいからヤダ。」

「悠哉！いい加減にしないと怒るよ！」

「わー！果南が怒った！」

「悠哉！逃げるな！」

悠哉は周りの友達とすくすくと育っていった。悠哉は小学校に入っても人気だった。

「悠哉〜！外遊びに行こうぜ〜！」

「ああ、すぐ行く〜！」

「悠哉君、私達も一緒に遊んでいい？」

「全然いいよ！やろうやろう！」

「ありがとう！」

「うん、どういたしまして！」

小学校に入ってから悠哉は学力もある程度ついてきた。

「悠哉〜！ここ、わかんないから教えて〜！」

「うん、いいよ。」

「待って、私もそこ教えて〜！」

「いいよ。」

悠哉は女子にもモテた。

「悠哉君、一緒に帰ろ〜！」

「うん、いいぜ。」

「待って！今日は悠哉君は私と一緒に帰るの！」

「ずるい！あとから割り込んできたくせに！」

「喧嘩すんなって！だったら二人とも一緒に帰ろうぜ！」

『うん！』

悠哉が小学3年生になったとき、転機が訪れた。悠哉がとある女の子Aに告白された。

「ずっと前から好きでした。付き合ってください！」

無論、悠哉には彼女はいなかったし、過去にもいたことがなかったので悠哉は喜んでその女の子Aの彼女となった。

「うん、よろしくな！」

「うん！」

その日から悠哉はその女の子Aと行動を共にするようになった。教室移動のときも、帰る時も。悠哉も彼女と付き合っているうちに、だんだん彼女の魅力が分かってきていた。しかし、悠哉と女の子Aが付き合ってから1か月後、女の子Aの行動が挙動不審になっていった。それには悠哉も気付いたのだが、女の子Aに聞いてみても「大丈夫、なんでもないから。」と言われて軽くあしらわれていた。悠哉は女の子Aのことを心配しつつ、それでも彼女の恋人として恥ずかしくないようにしてきた。しかし、悲劇は訪れてしまった。悠哉が女の子Aと付き合ってから2か月弱経ったある日のことだった。悠哉は女の子Aに呼び出されていた。悠哉は何かと思い、呼ばれた場所に時間通りにつ

いた。

「急に呼び出してどうしたんだよ。」

悠哉は女の子Aにどうして呼び出したのか聞いてみた。すると、女の子Aからは衝撃の発言が飛んできた。

「あのさ、わかれてくんない？」

「えっ…？」

まだ小学生の悠哉には理解ができていなかった。どうしてそうだったのか、理由が知りたかった。

「どうしてそんなこと言うんだ…？」

「だ、だって、私が悠哉君に告白したの、あれ、単なるいたずらだから。」

「…嘘。」

「本当。あなたのことなんてこれっぽっちも好きじゃないの！だからわかれて！」

悠哉には信じられなかった。悲しくて悲しくて、もうどうしたらいいのかわからなかった。悠哉はその場から立ち去ってしまった。その日、悠哉と女の子Aはわかれた。

しかし、これは悠哉に襲い掛かる悲劇の序章にしか過ぎなかった。

## 悠哉の過去 その2

悠哉が女の子Aに振られてから数週間が経ったある日。悠哉は女の子Bに呼び出されていた。

「土井君、この前Aちゃんに振られたって本当？」

「ああ、まあな。いたずらだったんだってさ。」

「そうだったんだ。つらかったよね。もし私でよければ助けてあげられないかなあ。」

「助けるつつつたていつたい何をするんだよ。」

「私と付き合ってくれませんか？それで少しでも土井君を助けてあげられればなって思っただけどダメかな？」

悠哉は一瞬戸惑った。またこの前と同じようにいたずらじゃないのか、と思った。でも、女の子Bはそういう嘘はつかないような人だ。きつと信用できる。悠哉はそう思っ  
て女の子Bの告白を受け入れた。

「いいよ。俺のほうこそ、よろしくお願いします。」

そう言うと、女の子Bはとてもいい笑顔をこちらに向けてきた。

「うん！よろしくお願いします！」

そこから悠哉と女の子Bは付き合った。悠哉は前のこともあつてか、一層女の子Bに嫌われないような行動を心掛けてきたつもりだった。しかし、悲劇は繰り返す。それから2・3か月が経つたある日。悠哉は女の子Bに呼び出された。

「あの、申し訳ないんですけど、わ、別れてくださいー！」

「ど、どうして?」

悠哉は信じられなかった。

「私、本当はか、彼氏いるの。悠哉君じゃなくて。ちよつといたずらでやつちやつただけなの。だから、別れて。」

この子がこないたずらをするなんて思っていなかった。女の子Bはその場から立ち去つて行つてしまった。悠哉はその場で泣き崩れた。

それから2週間半が経つた。悠哉は前よりも口数が減り、周りとも前ほど遊ばないようになつてしまつていた。それでも悠哉に好意を寄せるものは少なからずいた。悠哉は今度は女の子Cに呼ばれていた。

「あ、あんた、Bに振られたんだつて?」

悠哉はあんまりそのことを掘り返してほしくなかつたので適当に返すことにした。

「そうだけど?」

「その前にもAに振られたんでしょ。」

「それがどうしたんだよ。」

「あんた、彼女たちに何したのよ。いったい……」

「いや、俺は何もしてない。あいつらの告白は所詮いたずらだったんだよ。」

悠哉はこの前の二人に言われたことを思い出して言った。

「そ、そうなの。だったらこの私が付き合っただけなくもないわよ！」

悠哉は女の子Cがどういいうことを言っているのか正直わからなかった。

「えっと、どういいうこと？」

悠哉は女の子Cに聞いた。

「だ、だから！ どうせあんたは振られてばかりなんだから、この私が付き合っただけなくもないわよ！」

「いや、別にいいよ。そんないやいやで付き合っても意味ないだろ。」

もともと女の子Cは素直になれない性格だった。だからこのような言い方になってしまっていた。

「も、もう……一回しか言わないから！ よく聞きなさい！ わ、私と付き合っ……」

正直悠哉はこれもちたずらなんじゃないか、と思った。

「お前、それはいたずらじゃないのか？」

「そんなわけないでしょ！ この馬鹿！」

女の子Cはそう言った。悠哉はこの子はもともと嘘をつくのが下手な人だと感じていた。悠哉は3度目の正直という言葉信じ、女の子Cと付き合うことを決意した。

「わかったよ。これからよろしく。」

すると女の子Cはとても笑顔になった。

「仕方ないわね！しつかりしなさいよ！」

その日から悠哉は女の子Cと付き合った。悠哉は今までの経験を最大限活かして女の子Cと付き合っていた。より優しく、より仲良くするように努めていった。しかし、またしても悲劇は悠哉を襲う。それは悠哉と女の子Cが付き合ってから4か月くらい経った日のことだった。

「悠哉、やっぱり別れて。」

その言葉はもう悠哉は聞きなれていた。悠哉は取り敢えず理由を聞こうとした。

「なんで？」

女の子Cはさも当然のことかのように答えた。

「だって、あの告白、いたずらだし。」

それを聞いた瞬間、悠哉の何かが壊れた。

「アハ、アハハ、アハハハハ！」

「何よ、急に笑い出して！」

「やっぱそうだったんだ。どうせお前らは俺をそういう風に弄んでいたずらで告白して飽きたら捨てる。もうお前らなんて信用しない。」

「……」

「なあ、だったらさっさと俺の前から消えろよ。そして二度と近づくな。」

「……言われなくてもわかってるわよ！」

その言葉を聞いた女の子Cはその場から逃げようように去っていった。

その翌日。悠哉は幼馴染の女の子に呼び出された。

「悠君、聞いたよ。3人の女の子に振られちゃったって。大丈夫？悲しかったよね。つらかったよね。私、悠君の気持ち、よくわかるよ。でも大丈夫。私がつつと悠君のそばにいるよ。だから私と付き合おう。ね？」

しかし、悠哉は前までの悠哉とは人が変わってしまったていた。

「お前、何言ってるんだ？」

「えっ……？」

「どうせお前のそれもいたずらなんだから。」

「えっ……違うよ！そんなことないよ！」

「そんな言葉、信憑性が低いんだよ。もう俺は何も信じない。さっさとどっか行ってくれ。」

「そんな…」

それ以来、悠哉は女の子の告白はどうせ「いたずら」だと言い、告白はすべて振るよ  
うになつていった。

~~~~~

梨子 Side

悠哉君のお姉さんから、悠哉君の過去を聞いた。それは聞いているだけでつらくなる
ような話だった。しかし悠哉君本人はもつとつらく、苦しく、悲しかったのだろう。

「というのは表上の話よ。」

「えっ?」

結菜さんが言う。表上の話とはいったいどういうことだろう。

「表上の話ってどういうことですか?」

「そのまんまだよ。この話にはね、悠哉も知らない裏の話があるのよ。」

「えっ、それはいつたい、どういう…」

「さっきの話の中で悠哉を振つた3人の女の子がいたじゃない? あの子たちはね、本当
はあんなこと言うつもりはなかった。本当に悠哉のことが好きで告白したの。」

それだったらなんでそんなことをしたのだろうか。

「だったら、どうして…」

「3人とも脅されてたんだよ。とある女の子に。だから仕方なくあんな風に言って悠哉と別れたの。」

「その女の子っていうのは？」

「その子の名前は…」

梨子 S i d e E n d

悠哉と健吾

結菜と梨子がカフェで話しているとき

俺は家に向かっていた。というのも姉さんからメールで

『ちよつと用事思い出したから先に帰っていて。あと夕飯作つといてね。よろしく。』

ときていたからだ。全く。面倒くさいったらありやしない。

そんなことを考えながら家に向かっていると、突然、目の前に複数人の男の集団がこちらに向かつてやって来る。そして俺の前で立ちふさがった。

「おい、誰かは知らないが邪魔だ。どけ。」

「それはできない。ヘッドがあんたに話があるそうだ。」

ヘッド？誰だそれ。と思っていると、奥から見慣れた顔が現れる。

「ちよつとお久しぶりつすね、悠哉さん。」

「お前か。えーつと、名前何だったか？」

「網走健吾つすよ。忘れたんすか。」

俺の目の前に現れたのは俺が浦の星女学院に來た初日に梨子に絡んでいたあの不良

だった。

「あく、確かそんな名前だったな。で？ドアホ。なんか用か？」

「ドアホって……まあ今はそんなこといいんですよ。俺は今、あんたに怒っているんですよ！」

と言いながら俺の頬のあたりを殴った。

「……痛い。痛てえな。やるのか？」

「俺はあんたとやるつもりはない。」

「ふーん。じゃあ何が目的だ？」

「俺、見ちゃったんですよ。」

「何をだよ。」

「この前、梨子って人があんたに告ったでしょう。それですよ。」

こいつ、何やってんだ……

「はあ、お前、人の告白を見るって趣味悪いな。」

「たまたまだったんですよ。で、問題はその後です。なんであの子にあんなこと言ったんですか！」

「なんでって、当たり前前だろ。この世で一番信用できないのは女の告白だからだよ。」

「……なんでそんなことを平気で言えるんですか！」

「俺が前に騙されたからだよ。」

言ってしまった。

「…えっ？」

「小学校のときの話だ。俺は3人の女に騙された。だから俺はもう女の告白なんて信用しない。」

「…、そうだったんすか。」

「そうだ。だったらなんだ？もう話がないんだったら俺は帰るぞ。」

「待ってください！少しだけ、俺の話聞いてくれませんか？」

「なんだよ。面倒くさいから手短にしろ。」

「俺、あんたに会って、少しは変わったんすよ。前までは女なんてどうでもいい。そう思っていたからあんな風なことができていたんです。」

「あんな風なことって、梨子に絡んでいたことか？」

「はい。でも、俺、気づいたんです。女の顔に涙は流させてはいけなくて。悠哉さんはあの子に涙を流させないために俺らに突っかかってきたんだって。」

いったい何の話だ。

「だから俺はもう女の顔に涙は流させないと決めた。なのに、そのきっかけになったあんたが女泣かしたら意味がないだろ！」

いつの間にかこのドアホはタメ口になっていた。というかそっちの方が普通なのが。

「お前、何言ってるんだ？俺はお前らがうるさかったからボコしただけでそんな深い意味はない。」

「そうだったんですか。でも、俺見えましたよ。悠哉さんがあの子ととても仲良くしていたところを。」

「俺、梨子とそんなに仲良くしていたか？」

「はい。それなのに、あの人にあんなこと言ったままでいいんですか？」

「ああ、どうせまた『いたずら』だろ。」

「あんた、本当にそう思うのか？」

「あ？」

俺は突然のドアホの言葉に驚く。

「少なくとも俺の目に梨子さんの告白はいたずらのようには見えませんでしたよ。それなのにあんたは……！」

ドアホが話している中、俺の携帯に一件のメールが届いた。

「ちよつと待て。メールが来た。」

「えっ、今つすか？いったい誰なんですか？」

シヨッピングモール内のカフェ

「その女の子っていうのは？」

「その子の名前は…」

『(高海) 千歌(だ・よ)』

高海千歌という女

梨子 Side

「高海千歌よ。」

私はそれを聞いた時、信じられなかった、というのが第一印象だった。あの千歌ちゃんが、あの、私や曜ちゃんや悠哉君たちを A q o u r s に誘ってくれた千歌ちゃんがそんなことをするなんて考えられなかった。

「それは本当なんですか？」

「うん。本当よ。」

それを聞いてもやっぱり信じられなかった。

「彼女はね、あの子達を脅してたの。悠君に『告白はいたずら』って言って別れてって。私もその時は信じられなかった。昔からよく遊んでいたからね。あんなに元気に私や悠哉や曜ちゃんや果南ちゃんと一緒に遊んでたあの子があんな風になってたなんて想像も出来なかった。考えたくなかった。でもね。帰ってきた悠哉の顔を見て実感した。ああ、振られたんだなって。そして思い出した。高海千歌がそういう風に脅してたことを。」

結菜さんがそう話す。

「これを悠哉が知つたらもつと女の子が嫌いになる。だからこれまではこのことを悠哉には言わなかつた。でもね、もうそろそろ知つてもいいと思うんだ。」

私は結菜さんが言つたことに驚きを隠せなかつた。

「えつ、なんでですか？今言つたら余計に女の子が嫌いになつちやうような気がするんですけど。」

「それは君次第だよ。」

「？」

私は結菜さんが言っているのかわからなかつた。

「悠哉ね、最近家でよく君の話をしたんだ。梨子が、今日もまた梨子がつて。家に帰つてきて夕飯のときになるといつも君の話をするんだ。その時の私には悠哉が少しだけ笑顔になつてるように見えたの。愚痴つてるのにね。だからね。私はひとつの結論に至つた。この子なら悠哉を救えるんじゃないかって。」

「そんなことは。」

「ねえ、桜内梨子ちゃん。君はまだ悠哉のことが好き？」

結菜さんがいきなり私に尋ねてくる。

「も、もちろんです！私は悠哉君のことが大好きです。私は悠哉君に振られたとき、悠哉

君のことを忘れようと思いました。でも、何度忘れようとしても忘れられなかったんです。そして考えたんです。私は悠哉君のことが大好きなんだって！」

私はありのままの気持ちを素直にぶつけた。

「うん、大丈夫そうね！じゃあ早速……うん？」

結菜さんが驚いた声を上げる。

「どうしたんですか？」

「さつき悠哉からメールが届いたんだけど、これ。」

結菜さんが私にスマホの画面を見せてくる。そこには『さつき千歌からメールで呼び出されたから帰るのが遅くなるかもしれない。』と書かれていた。

「千歌ちゃん、何をするんだろう……」

梨子 Side End

~~~~~

俺は千歌に呼び出されて千歌の家の前の海岸に呼び出されていた。というかこの前梨子に呼び出された場所もここだったな。そんなことを思いながら千歌を待つ。少しすると後ろから声がした。

「悠君、ごめんね？待った？」

「いや、別にそこまで待ってない。」

そこには俺を呼び出した張本人の高海千歌が立っていた。

## 愛の証明

「悠君、ごめんね？待った？」

「いや、別にそこまで待ってない。」

俺の後ろには千歌が立っていた。

「で？今日は何の用だ？」

俺は千歌に聞いたのだした。

「うくん、別に用っていう用があつたわけじゃないんだけどうちよつと話したいことがあつて。」

「用がないんなら早めに済ましてくれ。」

俺は少し急かすように千歌に言った。

「分かつたよ。じゃあ最初つから単刀直入に聞くけど……」

「お前、単刀直入の意味覚えられたのか。」

千歌は昔から勉強があまり得意ではなかつたので少々驚いた。

「む。千歌だつてそれぐらいわかるもん！千歌のことバカにしないでよ！」

「悪い悪い。それで？話したいことつて何なんだよ。」

「あ、うん。もちろんその話はするよ。」

「じゃあもうその話をしてくれ。俺も別に暇なわけじゃないんだ。」

「もう、悠君はせっかちななあ。でもまあその話をするために呼んだんだしね。わかった。じゃあ、話すね。この前なんで悠君は梨子ちゃんの告白を断ったの？」

俺は一瞬戸惑った。なんでこいつまでも俺が梨子を振ったことを知っているのか。しかし俺はすぐに一つの結論を見出した。

「お前も見てたんだな。」

「うん。なんか海岸の方で見えたから来てみたら梨子ちゃんが悠君に告白しているところだったの。」

「そうか。あまり関心はしないがまあいい。そういうことだったのか。」

「うん。で？どうして梨子ちゃんの告白断ったの？」

千歌に俺が梨子を振った理由を追究される。

「簡単な話だ。いくら梨子が同じA q o u r sの仲間だとしてもやはり梨子は女だ。女の告白ほど信じられないものはない。どうせあれも“いたずら”なんだ。」

「それは今、千歌が悠君に告白してもそれは“いたずら”だって言われて振られちゃうってこと？」

「はっ。」

俺は千歌の言っていることを理解することが出来なかった。

「お前、何を言っているんだ？」

「千歌ね、やっぱり悠君のことが大好きなの。1回振られようが何回振られようが関係ない。千歌は絶対悠君のことだけは諦められない。」

「じゃあそれはどうやったたら証明できるんだよ。」

俺はそう尋ねた。

「え？証明していいの？じゃあ…。」

そう言うのと千歌は俺を押し倒して馬乗りになった。

「何すんだよ。」

「え？千歌の愛を証明するだけだよ？さつき悠君言ったよね？私の愛を証明しろって。キスしちやえば愛の証になるよね？」

そう言うって千歌は俺にキスをしようとする。

「千歌、やめろ。」

俺は千歌をなだめるように言った。しかしそれは逆効果だったようだ。

「なんで？悠君が証明しろって言ったんだよ？それなのに何でやめないといけないの？千歌は悠君のことが大好きだったんだよ？あの時悠君に千歌の告白が、いたずらだなんて言われてすつごく辛かったんだよ？」

あの時……か。そういえば最初に俺が女を振る時にそれが「いたずら」だろと言ったのは千歌だったか。

「それでようやく悠君と一緒になれてこんなチャンスが来たのに、それをやめるなんてできない。もう千歌、我慢出来ないよ。だからいいよね？」

そう言つて千歌は俺にキスをしようと顔を近づけてきた。そうか。千歌はそんなに俺のことを思っていてくれたのか。だったら受け入れてもいいんじゃないか。そう思つて千歌の愛を受け入れようとした瞬間……

「待ちなさい！」

そこに現れたのは姉さんと梨子だった。

Happy birthday 梨子!  
俺はずっとお前のそばにいる

今日は梨子の誕生日。俺は梨子とまだ付き合い始めたばかりだが梨子が好きな気持ちに変わりはない。今日は梨子と誕生日デートに行く。せっかくなら梨子にも楽しんでほしいので昨日までに色々考えた。そんなことを考えながら待ち合わせの場所へ向かった。

「おはよう、ゴホツゴホツ。」

待ち合わせの場所に着くともうそこには梨子の姿があった。しかし今日の梨子は普段の梨子より顔色が悪かった。

「おはよう、梨子。お誕生日おめでとう。」

「悠哉君、ありがとう。ゴホツゴホツ。」

「梨子、お前、具合悪いのか?」

「うん、ちよつとね。でも大丈夫。ゴホツゴホツ。」

梨子は大丈夫と言っているがとても大丈夫そうには見えない。

「さあ、折角だから早く行こ?」

梨子が上目遣いで俺を見てくる。

「わかったよ。でも、辛かったら早く言えよ。」

「うん、わかった。」

うん、今日も梨子は可愛い。

~~~~~

俺達は初めて一緒に来たショッピングセンターに到着した。

「本当にここで良かったのか？ほかの場所でもよかったのに。」

「ううん。私はここがいいの。ここは私にとって思い出の場所なの。初めて私と悠哉君と一緒に来た場所だから。」

「そうだったな。まあ梨子がいいならいいけどさ。今日はお前の誕生日なんだから遠慮なんてしないでなんでも言ってくれ。」

「わかった。じゃあ、えい！」

そう言うとき梨子は俺の手を握ってきた。しかも恋人つなぎで。

「梨子。いきなりどうしたんだよ。」

「私がこうしたいの。ダメ？」

また上目遣い。可愛すぎるんだよな。

「いいけど。それ、他の人にはするなよ。」

「え?なんで?」

「決まってるだろ。可愛いからだよ。そんな姿…ほかの人には見せたくないんだ。」

「…! 恥ずかしいけど////ありがとう♪」

梨子の顔がさらに赤くなった。

「じゃあ、行こうか。」

「うん。おとつと。」

出発しようとした時、梨子が俺の方によろけてきた。

「おい、本当に大丈夫なのか?」

「うん、大丈夫だよ。ちよつとよろけちゃっただけ。」

本当に大丈夫なのだろうか…

~~~~~

俺たちはまたあの洋服屋に来た。

「また服見るのか?」

「うん。私も少しはおしやれしないとね。悠哉君にずっと好きでいてほしいから。」

そんなこと言われなくてもずっと梨子のことを愛してるのに。

「そうか。じゃあ早速入ろうぜ。」

「うん。」

そうして俺たちは店内に入った。

「あんまり前と変わっていいないな。」

「まあ前来た時だつてそこまで前つてわけじゃないしね。」

「まあな。なんかめぼしいものはあるか？」

「うん、あれとかどうか？」

梨子が指さしたのは紺色のスカートと桜色の線の入ったブラウスだった。

「うん。いいと思う。というかお前なら何でも似合いそうなもんだけどな。」

「……！悠哉君、恥ずかしいよ／＼／＼」

「お、おう。悪い。」

「別に嫌つてわけじゃないけど……」

と言つて梨子はさらに顔を赤くする。

「じゃあそれは買うとして……ほかにここで欲しいものはないのか？」

「悠哉君は買わないの？」

「俺はファッションとかにあまり興味が無くてな。」

「じゃあ、私が選んでもいい？」

「またか。まあいいよ。じゃあ梨子、頼む。」

「うん！」

そしてちよつとすると灰色のカーディガンを持ってきた。

「これとかどうかな?これから段々と冷えるだろうし、これだったら調節とかもできるから。どうかな?」

「うん。これだったら学校に来ていつでもおかしくないし良さそうだな。梨子、ありがとう。」

「／＼／＼ズルいよ、悠哉君は…。」

「ん?なんか言ったか?」

「う、ううん。何でもないよ!ひ、独り言だよ!独り言!」

「そうか。だったらいいが。じゃあ、それだけ買ってとりあえず外に出るか。あ、金は俺が出すからあの時みたいに私が出す、なんて言うなよ?」

「う、うん。わかった。」

そうして洋服を買い、外に出た。しかし、梨子の身体に限界が到達した。  
バタン!

「:~:おい!梨子!大丈夫か!」

梨子は倒れてしまった。

~~~~~

梨子Side

私が目を覚ますと見知らぬ場所にいた。あれ？　そういえば悠哉君は？　そう思っていると急に部屋のドアが開いて悠哉君が入ってきた。

「おはよう。調子はどうだ？」

「う、うん。少し良くなった気がするけど。っていうかここはどこ？」

「俺の部屋。というか、辛くなったら早く俺に言えって言っただろ。」

「う、うん。ごめんなさい。」

「別に謝る必要はねーよ。それより、食欲はあるか？　おかゆぐらいだったらすぐできそうだけど。」

「あ、じゃあもらおうかな。」

「わかった。」

そして悠哉君はドアの向こう側に行ってしまった。

~~~~~

数分後

悠哉君がおかゆを持ってきてくれた。

「ほら、冷める前に食べ。」

「う、うん。でも、少しわがまま言ってもいい？」

「なんだ？」

「あ、あくんってしてほしいな…。」

あく、もう私は何を言っているのだろう。いくら風邪だからって悠哉君にそんなことをしてもらおうするなんて…。

「仕方ないな。いいよ。今日は梨子の誕生日だしな。ほら、口開けな。」

そう言つて悠哉君はれんげに少しおかゆを乗つけて私の口元に運んできてくれた。やっぱり悠哉君は優しいなあ。

「ほら、どうだ? 熱くないか?」

「うん。大丈夫。ちょうどいい温度だしとても美味しいよ。」

「よかった。でも、どうして俺に言わなかったんだよ。」

「だって、悠哉君とずっと一緒にいたかったから…。」

私がそう言うのと悠哉君は私にデコピンをしてきた。

「アホか、お前は。そんな理由で無茶していたのかよ。」

「だって…。」

「だってじゃないだろ。そんな理由で倒れられたんじゃこっちが困る。」

「…。」

「それに…。」

「?」



う。」

「ふふっ、ありがとう♪」

そうして私たちはキスをずっとしていた。そのあと悠哉君が風邪にかかって私が看病するのはまた別の話。







くれるわよね。そうじゃないと、私、悠哉君に何するかわかんないよ。でも、大丈夫だよね。悠哉君だもん。絶対に私の愛を受け入れてくれる。ちよつと待っててね。  
イマズグニタスケテアゲルカラ。

梨子 Side end

## 梨子の罨

ある朝、俺は起きてスマホを見てみると、一件のメールが届いていた。送り主は梨子だ。

『夏休みの宿題でわからないところがあったので私のうちに来て教えてもらえませんか？それ以外にも話したいことがあるのでできれば来てください。』

まあどうせ今日も家にいても暇だったのですぐに支度をして梨子の家に向かう。しかし、この選択があのようなことになってしまっうなんて、今の俺は考えてもいなかった。

~~~~~

梨子の家

梨子の家に到着したのでインターホンを鳴らす。すると、そんなに経たないで梨子が出てきた。

「あ、悠哉君。おはよう！今日は来てくれてありがとう！」

「おはよう。まあどうせ家にいても暇だったから別にいいよ。」

「それでも。本当にありがとう！さ、早く入って？」

「ああ、お邪魔します。」

そうやって俺は梨子の家に入っていく。梨子の家はとてもきれいだっただ。

「私、飲み物持ってるから行くから先、私の部屋に行ってくれませんか？私の部屋、2階にあるから。すぐわかると思うよ。」

「いや、飲み物運ぶんだったら俺も手伝うよ。」

「大丈夫だから、先行ってて？お願い。」

梨子が上目遣いでこつちを見てくる。

「わかったよ。じゃあ、先行ってるわ。」

俺も甘くなつたな。A q o u r s に入ってから。

「うん！お願い！」

そうして俺は梨子の部屋に入った。梨子の部屋はT h e 女の子といった感じで全体的にピンク色だった。

「お待たせ〜！飲み物持ってきたよ！」

そうやって梨子が入ってきた。

「ああ、ありがとう。じゃあ、さっさと宿題始めるぞ。」

「うん！よろしくお願いします！」

~~~~~

数時間後

時間は1時半。そろそろ昼飯を食って少し休憩を入れた方がいいと思い、梨子に話しかける。

「そろそろ昼飯の時間だし、きりもいいからいったん休憩にするか？」

「うん、そうしようかな。悠哉君ってお昼ご飯どうするの？」

まあコンビニまで行って買ってくりやいいだろ。

「コンビニ行ってなんか買ってくるわ。梨子はなんか欲しいものあるか？」

「え、コンビニ弁当なの？栄養が偏っちゃうよ！」

そんなこと言われてもなあ。

「それ以外に手段がないだろ。さすがに昼飯抜きたくねえし。」

「私、作るよ！私の分はもともと作る予定だったし、前に悠哉君にサンドイッチ作ってもらったことあるし。ね？いいでしょ！」

ああ、東京に行ったときに作ったやつか。別に暇だったから作ってただけなんだけだな。

「わかった。じゃあ、お願いします。」

「うん！」

そう言って梨子はキッチンに向かっていった。

~~~~~

数分後

梨子がオムライスを持ってこっちに来る。普通に美味そうである。

「ふふふ！今日はオムライスを作ってみたんだ。秘密の隠し味も入ってるの。悠哉君のお口にあうといいな。」

「そうか。梨子、ありがとう。じゃあ、早速、いただきます。」

「どうぞ、召し上がれ！」

そうしてオムライスを一口食べる。美味しい。だけど、少し独特な味がする。

「梨子、隠し味ってなんだ？」

「ふふふ！それは、ひ・み・つ！」

なんだそれ。まあいいか。

「それで、味はどう？」

「うん、普通に美味しいよ。」

「よかった〜！悠哉君のお口にあったみたいで嬉しいな！」

「うん、まあな、つてお前、その指どうした？」

俺が見ると、梨子の指には切り傷がついていた。

「ちよつと、包丁で切っちゃっただけだから、心配しなくても大丈夫だよ。」

「傷が残ったらどうするんだ。取り敢えず絆創膏だけでも貼っておけ。」

俺はバツクの中から絆創膏を取り出して、怪我したところに貼り付ける。まったく、少しは気をつけろよ。

「あ、ありがとう。悠哉君。」

「別に。少し絆創膏貼っ付けただけだろ。」

「それでも。あと、この前は何度もしつこくして、ごめんね。」

「この前? いったいいつのことだ。」

「この前? っていう話だよ。」

「ほら、一緒に買い物に行った後に私、悠哉君に告白したでしょ。その時のこと。もう、悠哉君忘れちゃったの? 悠哉君ってば、忘れん坊さんなんだから。」

ああ、あの日か。あの時は少し言い過ぎたかもな。一応謝っておこう。

「ああ、あのときか。別に気にしてない。俺のほうこそ少し言い過ぎた。悪かった。」

「そんなこと言わなくて大丈夫よ。仕方なかったんでしょ。あの女に脅されて。でももう大丈夫。私が助けてあげるから。」

「はっ。」

そう、思った瞬間、ものすごい眠気に襲われ、俺はそのまま寝てしまった。

「ふふふーこれでようやく、悠哉君は私のもの……」

俺が眠りにつく前に見たものは、梨子のもものすごく黒い笑顔だった。

監禁

俺が目が覚めると、梨子の部屋だった。そりやそうだ。寝てただけだし。そう思つて起き上がろうとすると、手首に何かが巻き付いていて思うように動くことができなかつた。手首の方を見てみると両手首とも、紐で縛られていた。

「なんだよ、これ。」

俺がそうつぶやくと、梨子が部屋の扉を開けて入つてきた。

「あ、悠哉君、おはよう！結構寝てたね。」

「ああ、おはよう。そうなのか。それよりも今のこの状況について詳しく。」

俺がそう言うおうとしたとき、俺の唇を何かがふさいだ。俺の唇をふさいだそれはとても柔らかいものだった。すぐに梨子の唇だとわかる。そのまま俺の口の中に舌が入つてくる。そんな状態が約3分間続いた。

「ん：：／／／むちゅ：：／／／ぷはあ：：／／／うふふ！悠哉君に私のファーストキス、あげちゃった♡／／／」

「ぷはあ：：梨子、いきなり何すんだよ。」

すると、梨子はさも当然かのように答える。

「何って、普通のキスだよ、キス。悠哉君の毒を早く浄化してあげないといけないから♡
／／／」

「は？何を言っているのか全く理解できない。」

「梨子、どういうことだよ。まず毒ってなんだ。俺は毒を飲んだ覚えはないぞ。」

「いいえ、毒されちゃっているわよ。あの豚女に。」

あの豚女とは誰だよ。

「あの豚女って誰だ。」

「名前は知らないけど、この前の土曜日に沼津のショッピングモールで悠哉君の腕に抱き着いていたあの女よ。」

この前の土曜日…… ああ、姉さんのことか？

「きつとそれ……」

「大変だったよね。つらかったよね。でももう大丈夫だよ。ここにいればあの女に二度と会わなくて済むからね。だからずっと一緒にいよう？」

それはたぶん姉さんだ、と言おうとしたが梨子に遮られる。まあそれはまだいい。それよりも、

「なんで俺がここにずっといなければいけないんだ。」

「だって、私たちは相思相愛だから♡／／／」

相思相愛？こいつ、意味をしっかりわかってないだろ。

「いつから俺とお前は相思相愛になったんだよ。」

「えっ、ずっとでしょ。もう、悠哉君ったら恥ずかしいこと言わせないでよ♡／／悠哉君は私の血も美味しいって言ってくれたものね。嬉しいわ♡／／」

「おい、ちよつと待て。いつ俺がお前の血を美味しいって言った？」

「だっってお昼ご飯の時、私の血を食べてくれたじゃない。」

「えっ、それってもしかして…。」

「うん、オムライスの中に私の血を混ぜちゃった♡／／」

それを聞いた瞬間、俺は近くにあったゴミ箱の中に嘔吐してしまった。

「なんで吐くの？まだ私の愛情が足りていないの？それともやつぱりあの雌豚のせいなの？許せない。ね？あんな雌豚じゃなくて私と一緒にいよう？私は悠哉君のためなら何でもするよ？だから私を愛して？」

梨子が話す。しかし梨子の目に光は灯っていなかった。

「お前、いったいどうしたんだよ。」

「どうしたもこうしたもないよ？ただ悠哉君のことが大好きなだけ。だから悠哉君のためなら何でもできる。人を好きになるってそういうことなんじゃない？」

「知らん。」

「やっぱり悠哉君は無愛想だなあ。でもそんなところもかつこいいよ。ますます好きになつちやうわ♡／／／」

何が梨子をこんな風に変えてしまったのだろうか。

「なあ、梨子。この紐はいつになつたらほどこいてくれるんだ？」

一応聞いてみる。

「悠哉君はほどこいて欲しいの？」

「まあな。」

「でもそれはダメ。ほどこいたら悠哉君、逃げちやうでしょ。そしたらまたあの雌豚に毒されちやうもん。そんなこと絶対させない。悠哉君は私が守る。だから悠哉君、ずっと私と一緒にここにしよう？」

ここから俺の監禁生活が幕を開けてしまったのであった。

逃亡

あれから今まで俺は梨子の家から出ることはなかった。それに加え、食事は毎回のよ
うに「あ〜ん」じゃないと食べさせてくれない。しかも、梨子は隙さえあればキスをし
たり抱き着いてくる。いったいどうしたらいいのだろうか。

「悠哉君？何考えているの？」

俺を監禁している張本人の梨子が俺に話しかける。

「別に。何にも考えてなんかいない。」

「そつかく。じゃあ、んちゅ♡／／／」

そしてまた梨子が俺にキスをしてくる。

「ん、いきなりキスしてくんのいい加減やめろよ。」

「いいじゃない♡これからずっとここで暮らすんだから♡／／／」

また言っているよ。

「なあ、いつまでこんなこと続けるつもりなんだよ。」

「だ〜から〜、ずっとだよ、ずっと。高校を卒業しても、大人になっても、おじいさん
おばあさんになってもずっと一緒。さつきも言ったよ？もう、悠哉君の忘れん坊さん



「今はお前の親がないからいいかもしれないけど親が帰ってきたらどうするんだよ。」

「お母さんは物分かりがいいから大丈夫よ♡」

はあ、このままだと本当にずっとこのままになつてしまう。取り敢えず脱出手段を確保しなくてはならない。幸か不幸か俺を縛っているのは紐だ。やろうと思えば切れる。ただ……刃物がない。どうしようか。そう考えていると、ふと窓の外から声がした

「梨こ子こちゃん！」

声の主は千歌だった。

「梨子、なんか千歌に呼ばれているぞ。」

「えっ、あ、本当だちよつと待つててね。何？千歌ちゃん。」

「あ、梨子ちゃん。やつと出てくれた。だつて最近ずつとカーテン閉めてたんだもん。」
千歌と梨子が話している間に俺は梨子の机の上にキラリと少し光るものを見つけた。カッターナイフだ。あれなら少し机を押せば落ちてきそうだ。そう思つて梨子の机を蹴る。案の定カッターナイフは落ちてきた。しかし、少し蹴る力が強かったのか、大きな音が出てしまった。梨子がこつちを向く。しかし、俺は間一髪のところカッターナイフを隠すことができた。梨子のもとに戻り千歌と話をしている。その内に俺はカッターナイフで紐を切ろうとする。なかなか切れない。それでもどうにかしようと思

やり切ろうとする。腕に当たって少し切れる。しかし、ようやくカッターナイフの刃の部分に紐に当たる。そのまま無理やり刃を押し当てて切る。そうして紐を切ることに成功した。その時の俺はものすごく気が動転してしまい、紐が切れた瞬間にバッグを持って走り始めてしまう。

「あ、悠哉君！行っちゃダメ！」

「なんで悠君が梨子ちゃんの部屋にいるの？」

俺は何も聞かず、そのまま階段を駆け下りる。そのまま玄関で靴を履き、ドアを開けて走り出す。自転車できていたことを忘れて。外はもう夜でとても暗かった。走れ、走れ。心の中でずっとそう念押ししながら走り続ける。梨子に捕まったらまたあの監禁生活に戻ってしまう。そう思いながら走り続ける。案の定梨子は追いかけてきていた。ずっと縛られていたためか足取りがおぼつかない。だんだんと俺と梨子の距離が縮まってくる。やばい。このままだと捕まってしまう。そう思った時、俺の目に映ったのはいつぞやの不良だった。

「おい、お前！」

「あ、悠哉さん、どうしたんすか？」

「ハア、ハア その、バイクに乗せてくれ……！」

「えっ、まあいいすけどどうしてっすか？」

「いいから！早く！」

「ういっす…。」

そのまま俺はこの不良のバイクに乗り込む。不良もすぐに乗り込み、エンジンをかける。そしてバイクは走り出した。

「悠哉君…：なんで逃げるの？なんでなんでなんでなんでなんでなんで？」

~~~~~

バイクに乗って逃げている中、ドアホが話しかけてきた。

「悠哉さん、あんた、なんであの梨子さんから逃げてたんですか？」

「はあ、ついさつきまで梨子に監禁されてたんだよ…。」

「えっ、どういうことっすか？」

「知らん。ただ監禁されてたのは事実だ。だから逃げてきたんだ。」

「そうだったんすね。」

と、その時、目の前から一人の女性が現れる。最初は誰かわからず、身構えてしまっただが、よく見れば姉の結菜だった。

「悠哉！」

そう言っつて姉さんが近づいてきた。

「悠哉、どうしたの？どこにいたのよ！」

「すまん。ちよつと梨子に監禁されてた。」

「大丈夫なの？」

「まあ。それより、姉さん。一つわがまま言っただいいか？」

「何？」

「引越したい。」

## 千歌と梨子

梨子 Side

悠哉君が私の家から逃げ出してから数日が経った。今日はA q o u r sの練習があるため、学校に向かう。悠哉君をどうやって連れ戻そうか、そんなことを考えながらいつものバス停に向かう。しかし、いつもはそこにいるはずの悠哉君の姿が見えなかった。

「梨子ちゃん、おはヨソロソ！」

「曜ちゃん、おはよう。千歌ちゃんもおはよう。」

「…おはよう。」

曜ちゃんが私に挨拶をしてきたので返事を返す。そのまま千歌ちゃんにも挨拶をする。しかし、千歌ちゃんはこつちを睨みながら小さい声で挨拶を返してきた。

「どうしたの？」

「…何でもない。」

千歌ちゃんの心配をするも、何でもない、と返されてしまった。

「ところで曜ちゃん、今日悠哉君見てない？今この場にはいないみたいだけど。」

「うくん、悠哉先に行ったんじゃない？」

「そうだね。きつと悠哉君のことだから先に行ったんだろなあ。じゃあ私たちもバス来たし行こっか。」

「うん！」

~~~~~

学校に着いて屋上に向かう。屋上には3年生の3人がいた。私たちが来た後から1年生の3人が到着する。だが悠哉君の姿はない。

「あれ？悠哉君まだ来てないはずらか？」

「寝坊しちゃったのかな？」

「あのリトルデーモン、ヨハネにはいつも寝坊するなっていうくせに、寝坊するなんてありえない！」

「…あのね。」

1年生の3人が悠哉君が来ていないことに対し、色々言う中、突然鞠莉ちゃんが口を開いた。

「どうしたの？鞠莉ちゃん。」

「悠哉のことなんだけど… もう悠哉はここには来ないわ。」

「えっ？」

私は一瞬鞠莉ちゃんが何を言っているのか理解出来なかった。

「それってどういうこと？」

「そのままよ。彼、この前引越したの。」

私は鞠莉ちゃんが言ったことに驚きを隠せなかった。

「……どうして！どうして引越したの！悠哉君はどこに行ったの！」

私は思わず鞠莉ちゃんの胸倉をつかんでいた。

「梨子ちゃん！落ち着いて！」

「梨子！やめなよ！」

「梨子さん！やめなさい！」

曜ちゃんと果南ちゃんとダイヤさんに止められる。でも私は鞠莉ちゃんをつかんでいる手を離さなかった。

「ねえ！鞠莉ちゃん！教えてよ！ねえ！早く！」

「……教えられないわ。」

「……なんで！なんで教えてくれないの！」

「私は理事長よ。元とは言えこの学校の生徒の個人情報をもっとやすやすと渡すわけにはいかないわ。それに悠哉からあなたの話は聞いたわ。それを聞いて私は確信した。最近のあなたはおかしいわよ。」

「鞠莉！さすがにそれは言い過ぎだよ！」

「いいわよ……」

『えっ？』

「いいわよ！悠哉君を助けるためなら私はおかしくてもかまわない！だって悠哉君を助けられるのは私だけなんでもん！そのためなら私はなんだってできるの！」

「梨子……」

「だから早く教えてよ！」

「……ダメよ。」

「なんでよ！」

「果南ちゃん！ちよつと手伝って！」

「わかった！」

曜ちゃんと果南ちゃんに取り押さえられる。

「曜ちゃん！果南ちゃん！離してよ！」

「梨子ちゃん、どうしちゃったんずらか？」

「びぎい……梨子ちゃん……怖いよ……」

「こんなリリー、初めて見た……」

「仕方がないので今日は解散といたしますわ……」

~~~~~  
ダイヤさんの一声で今日の練習はなくなつた。私は悠哉君がどこかへ行つてしまつたことに悲観しながら家に向かおうとする。すると後ろから聞き覚えのある声が出た。「ねえ、梨子ちゃん。」

私は後ろを振り向く。そこにいたのは千歌ちゃんだった。

「どうしたの、千歌ちゃん？今私あんまり機嫌がよくないんだけど。」

「なんで？」

「？」

「なんで梨子ちゃんの部屋に悠君がいたの？」

千歌ちゃんにこの前悠哉君を私の部屋に閉じ込めていたことを追求される。

「なんでつて、悠哉君を助けるためよ。」

「それは梨子ちゃんの役目じゃないよ。」

千歌ちゃんにそう言われる。

「何、それ。」

「悠君は私のだよ。だから悠君を助けるのは私の役目。梨子ちゃんの出る幕はないよ。」

「何を言うのかと思えば、そんなこと？」

「？」

「千歌ちゃん、悪いけど嫉妬にしか聞こえないわ。」

「……」

千歌ちゃんが私の胸倉をつかんでくる。

「千歌ちゃんには悪いけど悠哉君に必要なのは私だよ。」

「梨子ちゃんにそんなこと決める権利ないでしょ！」

「そうね。でも悠哉君は私を選んでくれるわ♡／／／」

「なんでそんなことわかるの？」

「だって私と悠哉君は相思相愛なんだもん♡／／／悠哉君は私の血も美味しいって言うてくれたし♡／／／」

「何…それ…」

「だからね？千歌ちゃん。千歌ちゃんの出る幕はサインダヨ。」

梨子 Side End

## 5年後の悠哉

…？（こ）はどこだ？

「ねえ、悠君。」

そう話しかけてきたのは千歌だった。

「なんでここにいるんだ？」

「そんなの関係ない。どうしてAqoursのこと捨ててどっかに行っちゃったの？」

別に捨てた訳じゃ…

「悠君にとつてAqoursなんてどうでもよかつたんだよ、千歌ちゃん。」

「曜？俺はそんなつもりじゃ…」

「やつぱりそうだったんだね。そりゃルビィ達みたいな田舎のスクールアイドルを悠哉さんがまともに相手しようなんて考える訳ないもん。」

「そうすら。どうせ悠哉君の中では丸達は所詮アイドルっぽいことやってるだけの女子としか思っていないはずだよ。」

「そうやっていつも家で私たちのことを馬鹿にしていたんでしようね。」

ルビィ、花丸、善子まで… 一体どこなんだよ、（こ）は！

「自分の身のことしか考えてない屑だしね。」

「やはり他人のことより自分のことの方が大切なんでしょう。」

「そりゃ簡単にA q o u r sのこと簡単に捨てられるわけだね。」

鞠莉、ダイヤ、果南もかよ… なんてみんなこんな酷いことを言うんだよ…

「悠哉君？」

ふと、後ろから声がある。千歌の声ではない。曜の声でもない。もちろん1年生の声でも3年生の声でもない。でも、聞き覚えがある。この声は…

「ようやく見つけた… なんて私から逃げるの？ 私は悠哉君のことだけを考えているのに…」

恐る恐る後ろを振り向く。そこにあつたのはワインレッドの髪をしたロングヘアの同い年の少女… 桜内梨子の姿だ。

「なんで… ここに…」

「ずっとずっとずっとずっとずっとずっとずっと悠哉君のためになるようなことしかしてないのに… それでも悠哉君は逃げるんだもん。そんな悠哉君にはお仕置が必要だよね…」

桜内はそう言うのと懐から包丁を取り出した。

「悠哉君を殺して私も死ぬ。そうすればもう二度と離れることはないよね…」

そうして、桜内は俺に向かって包丁を突き刺してきた…

~~~~~

「うわあああああああああ！」

目が覚めるとそこはベッドの上だった。なんだ、さっきのは夢か。びっくりした。

俺が内浦を離れて5年もの月日が経った。今俺は東京で一人暮らしをしながら大学に通っている。最初一人で大丈夫かと思ったりもしたが慣ればなんてこともなかった。Aqoursのやつらとはあまり連絡は取れていない。ただ、俺が内浦を離れて1カ月もしないうちに鞠莉から聞いた話だと俺が東京に引越した数日後に、Aqoursは解散することになってしまったようだ。理由は桜内がAqoursをやめ、千歌ももうやめたいと言ったためらしい。鞠莉は俺のせいではないと言ってくれたが、やはり多少の罪悪感はある中であつた。しかし、俺はそれを心の奥底にしまい込んでしまった。そんなことを考えながら今日も大学へ向かった。

~~~~~

大学内

「お〜い、悠哉くん。」

この学校の校内は落ち着く。きれいな校内の中に大きな教室。机も広くて眠りやすい。だが…

「悠哉くくん？起きてるんでしょ。ねえねえ、起きないと頬つぺたにキスしちゃうよく？」

「ふざけるな。何度言ったらお前は分かるんだ。俺に関わるなど言っただろ。」

この女のせいで眠りを妨げられるのであった。

「そういうこと言われるとなおさら関わりたくなっちゃうのが人つてもんだよね。」

この俺の安眠を妨害してきた女は花山舞という。俺が大学に入ってきた初日からずつとこんな調子で話しかけてくる。鬱陶しい。

「何の用だよ。俺を起こしたつてことはなんか用事があるんだろ。」

「ん？特にないよ。単に面白そうだったから。」

本当にこの女は……ただこれも1年の時から続いている物でありすっかり慣れていった。

俺は内浦を出て以来、女との関りを全て断ち切ろうとした。なので最近俺に話しかけてくる女はこいつぐらいなものだ。でも俺はできればもう女とは関わりたくない。もう監禁されるなんてこりごりだから。そういうようなことをされないためにはまず関わらなければいい。もう、二度とあんな目には会いたくない。